

「右！」

皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が一斉に右を向いた。

「左！」

皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が一斉に左を向いた。

「解散！」

皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が整然と解散した。

兵士達は訓練を終えた後、秩序に沿って、持ち場に戻る——それを見て、ユリアヌスは訊ねた。

「セヴェルス、君の目から見て、彼らはどうだ？」

「強いげす」老将セヴェルスは断定した。「わしが敵なら戦う前に逃げ出すでげす。皇帝陛下の命令に全員が従っているだけでも大したものですが、解散した時、押し合いへし合いにならなかった。その上、皆、足元が綺麗だ」

セヴェルスの深言にユリアヌスも頷いた。彼の言う通りだ。ユリアヌスも昔は一斉行進など誰にでもできると思っていたが、実際は違う。単純な行進でも、大軍では困難だ。それを克服するには訓練が欠かせない。特に解散した後、一万を超える兵士が誰一人衝突を起こさなかった。その一点でも錬度の高さがわかる。また、足元が綺麗という事は、装備の手入れを怠っていない証である。この兵士達は錬度だけでなく規律も優れている。

「トゥルート、君の目から見て、彼らはどうだ？」

「一対一なら勝てる」トゥルートも断定した。「だが、束になられたら、手に負えない。特に伍（五人集団）を組まれたら、こつちが五人でも負ける」

トゥルートの直言にもユリアヌスは頷いた。彼女の言う通りだ。トゥルートの槍働きは凄まじい。いかにローマの精鋭といえども、個人戦では勝てない。しかし、ローマの強さは錬度と規律——そこから生まれる集団戦法である。

「アンミアヌス、この水準にある兵士の総数は？」

「はっ、総勢一万三千です」

「……ゲルマンに挑むには多いとは言えないな」

「ですが、彼らは元首制時代の正規兵に匹敵するかと思われず」

「そうか……いや、その通りだろうな」

アンミアヌスの評価は陰鬱なものを含んでいた。しかし、正鵠であろう。

全盛期のローマ正規兵とは皆このような者だったはずだ。第一、徴兵の必要すら、多くなか

った。ローマ正規兵になる事は、市民にのみ許された特権であり、高貴な義務であったからだ。男子たるものは皆、ローマ正規兵になる事に憧れ、志願者に事欠かなかった。ローマ軍はその中から、文字通りの兵つわものを選びすぐればよかった。自然、強かった。

だが、今は違う。ローマは弱い。弱い者は憧れるに足りえないから、志願も少ない。すると、貧弱な者も兵とせねばならない。結果ますます弱くなる。悪循環である。

皮肉な事だが、トゥルートなどが軍中にいる事自体、ローマが弱くなった証だ。

かつては知力や体力、視力だけでなく、体格ですら標準以下ならば、落第としていた。トゥルートがいかに異能の強者でも、少女である以上、身体検査で落第とされていたはずなのだ。それが軍中に潜り込める。これは今のローマ軍が身体検査すら、まともに行わず徴兵している事を意味する。

——いや、それどころか、嫌がる者を捕え、無理矢理兵士にしたりもしているだろう。

これで強かったら、奇跡だ。

当然そんなはずもなく、今のローマ軍は弱い。肉体で劣っている上に、士気も低い。装備や兵站、制度や戦術で補うにも限度がある。ユリアヌスの初陣が大敗に終わった第一の理由は、司令たるユリアヌス自身の無能だ。が、第二の理由としては、兵士が弱く、戦う前に逃げ出す輩も多かったからだろう。

——意欲のない者を戦場に出せば、当然か……。

しかし、この一万三千はあの二万とは違う。初陣のようにユリアヌスが震えて動けずとも、彼らは自ら、勇敢に戦い、敵兵を追い散らす。そう確信できる精鋭だ。

——ならば、『無駄飯食らい』は『足手纏い』だな。

何しろ、今度の攻撃目標はアルゲントラトゥム（現ストラスブル）である。

これは今ローマを侵食しつつあるゲルマンの根拠地だ。つまり、敵領土を延々突き進んで、中枢を撃破する事になる。やたらと兵士を増やしても、食料の減りが早くなるだけだ。

——かつてのユリウス・カエサルが滅多に軍団兵を補充しなかったのも同じ理由か？

信頼を置けない兵士を前線に出し、補給を難しくするぐらいなら、その人手は兵站の強化に回す方がいい。敵地で戦う時は特にそうだ。少なくとも、ユリアヌスはそう考えた。少数だが、精鋭の一万三千を戦闘に集中させるため、残りの兵力は後方支援に注力させるのだ。

——…：それに正帝への配慮も必要だ。

馬鹿馬鹿しい話だが、ユリアヌスはそういう事も考えねばならない。ユリアヌスはあくまでも『副』帝なのだ。戦力の出し惜しみはよくないが、出し過ぎると正帝の面目を損なう。仮に正帝コンスタンティウス二世当人がわかってくれても、周囲が煽るだろう。

だから、今回のユリアヌスは裏方に相応しい戦力で行くべきだ。

ユリアヌスは長い黙考の末、結論を導く。

「よし、我々はこの一万三千で挑む。正帝陛下が派遣された【将軍】バルバティウス殿は三万を率いるという。合わせて、味方は四万三千。報告によれば、敵兵はおよそ三万五千。これなら勝てる」

「〔御意！〕」

セヴェルス、トゥルート、アンミアヌスが一斉に頷く。

「……………え？ 本当にいいの？」

ユリアヌスは自分で不安を口にした。この場にサルステイウスはいない。バルバティウス將軍との連携のため、東に向かっているのだ。そして、そのサルステイウスはこのように頷く事などなかった。ユリアヌスの大まかな方針は尊重しても、必ず瑕疵を指摘し、そこを修繕する進言をする。だが、この三人は賛同のみを述べた。

しかし、アンミアヌスはあえて言う。

「陛下。失礼ながら、陛下が私を甘言多き佞臣と疑っておられるのは承知の上です」

「……………」

あ、バレてた？——と返す訳も行かず、ユリアヌスは黙り込んだ。

「それだけでなくとも、私はサルステイウス様の半分も生きておらぬ若輩。信頼できぬのも当然。しかし、それでもなお言わせてもらいます」

アンミアヌスは語気を強くした。今や、ユリアヌスの下にはサルステイウスをも上回る軍歴の主セヴェルスがいる。内政ならばともかく軍事において、サルステイウスを頼る必要はない。むしろそれはサルステイウス様への依存であり、甘えだという。

「そもサルステイウス様が陛下の軍略に一々口出ししてきたのは、ひとえに陛下がド素人であったが故。陛下があまりにアツパラパーであったが故です」

……………とりあえず、ユリアヌスはアンミアヌスへの佞臣という印象を改めた。

「実戦経験は絶無。社会経験も皆無に等しい。幽閉されていた事情を加味してなお、ヘタレでオタクで引きこもり。……………失礼ながら、ユリアヌス様はこんな青年に運命を委ねようとなさいますか？」

「い、いや……………」

ユリアヌスは泣きたくなってきた。

しかし、アンミアヌスは大人だった。彼はユリアヌスとは同世代だが、就労経験がある男はやはり違う。落として、上げる。それをわかっていた。清々しい声で言う。

「ですが、今は違います」

「今のは熟慮の上の発言だったろ？ 日頃の饒舌がなかった。無駄口が少ないのは、いい男の証だぜ」

「そして、いい指揮官でげす」

アンミアヌスに続いて、トゥルート、セヴェルスが言葉を繋げた。

これもまた甘言だ。ユリアヌスのどこか冷めた部分が告げる。だがそれでも、ユリアヌスは別の意味で泣きたくなかった。

——『幸福はその人が真の仕事をするところにある』！！

無職時代、幽閉されていた事は辛かった。殺意を向けられていた事も辛かった。しかし、今思えば、誰にも必要とされなかった事こそが苦しかった。実兄ガルスや義姉エウセビアはよくしてくれたが、それは身内への親愛である。勿論それはかけがえのないものだ。

しかし、今は社会に出て、他者に認められているのだ。

「よ、よし。今回は合戦ではなく、会戦となる。すす、すなわち、敵戦力の撃退ではなく、殲滅を目的とする。皆励むように」

ユリアヌスは感涙に咽ぶのを誤魔化すため、必死に皇帝としての言葉を吐いた。

……もつとも、これがユリアヌスの甘さであったのだが……。

「バルバティウスが来ていないっ？」

ユリアヌスは思わず叫んでしまった。

ゲルマンの根拠地アルゲントラトゥム（現ストラスブル）まであと三日。そんなところで、シヤハラザードから驚きの報告を受けたのだ。

「ええと、バルバティウス將軍はメディオラヌム（現ミラノ）を出発した後、アルプスを越え、バリシア近くでラ^レイン^ス川架橋に入ったのですが……」

シヤハラザードによる報告内容は妥当だった。……そこまでは。

「数日待機した後、バルバティウス將軍の命令で引き返したそうです」

「はああああああ？ 何でだよっ？」

「いや、何でと申されましても……」

わたしはバルバティウス將軍ではないのでわかりませんよ。シヤハラザードはそんな困った顔をした。

ユリアヌスは「ああ、すまない」と謝った。シヤハラザードにはその技能を活かして、偵察や間諜をやって貰っている。そして、その報告に主観を交えないのは、むしろ任務に忠実な証だろう。

情報をもとに判断するのはユリアヌスの仕事である。

「それ、何か事情はなかった？ 例えば、ゲルマンが他の地点を攻撃してきたとか……」

「ええ、付近を略奪するゲルマンは多かったです」

「なるほど、バルバティウス將軍はそれを喰いとめるべく戦い、足止めを食らった訳だ。いや、

それはむしろ誉ほまれというべきだね。軍人たる者、市民の安全を第一に……」

「いえ、逆です。バルバティウス將軍は徹底した無視を貫きました」

「……それ、本当に事情があるんだよね？ だって、実際に市民は略奪されていたわけですよ？ 三万の兵を持ちながら、目の前で市民を見捨てるなんて……」

「……バルバティウス配下の兵士にも同じ意見はあったかと」

シヤハラザードはそこで初めて主観を交えた。さらにバルバティウスへの敬称も捨てていた。理由はわかる。バルバティウスの態度はあの前騎兵長官マルケルスと同じだからだ。

背筋にひやりとしたものが流れる。

勿論、今のユリアヌスは一万を超える精銳に囲まれている。しかし、敵中孤立という点ではセノネスの時と同じだ。そして、セノネスの時と違い、盾となる城壁はない。

「……他の偵察の報告を待つよ」

「はい。それがよろしいかと。わたし一人では情報収集にも自ずと偏りが出ますから」

まだ、シヤハラザードの報告が間違っている可能性もある。矛盾する報告がない以上、淡い期待かもしれない。しかし、可能性は……

「サルステイウス様からの書簡です！」

その時、アンミアヌスが駆け寄ってきた。ユリアヌスはすぐに受け取る。前述の通り、サルステイウスは問題の將軍バルバティウスの所にいるからだ。

即座に開封すると、その内容は以下の通りであった。

——「バルバティウスはマルケルスと同類」

ユリアヌスは思わず呟く。

「……急いで撤退……」

「……できるのですか？」

アンミアヌスが小声で尋ねてきた。ユリアヌスは朦朧としたまま答える。

「この一万三千は精銳だ。最悪、追撃を躲しつつの敵中突破になるけど、強行軍も不可能では……」

「背後の市民は？」

シヤハラザードが冷たい声で指摘した。そんな彼女をトゥルートが何故か睨みつける。

だが、指摘は正しかった。初陣の時のドウロコルトムと同じだ。この精銳一万三千の送り出すために、ガリア全土へ負担をかけているのだ。ここでユリアヌスが退けば、間違いなく、ゲルマンは蹂躪を始める。そして、ガリアの市民に抗う力は……。

「ううああああああっつつつ！！」

ユリアヌスは頭を抱え、叫び喚いた。

「こんなのどうしろっていうんだよおおおおお？」

しかし、忠臣に恵まれていた。アンミアヌスは「人払いを。それから緘口令だ。流言飛語があれば、その場で斬れ。責任は私がとる」と周囲に指示を始める。

そして、トゥルートは勿論、シャハラザードもそれ以上何も言わない。

彼女たちも本当は不安なはずだ。それでも、黙っていてくれた。

だから、ユリアヌスは一人子供のように蹲った後、泣き声で告げる。

「……時間をくれ。明日の正午には結論を出す」

決断が遅れる毎に犠牲が増える。しかし、決断を誤れば、さらに犠牲が増える。

ユリアヌスは兵士と市民の犠牲と引き換えに、熟慮の時間を求めたのだった。

|| || || || || || || 第九話 (A.D.357) 中編 || || || || || || || || || || || || || || || || ||

一万三千で敵中孤立——まさに最悪の事態だった。

敵する蛮族軍は三万五千、自軍の倍以上である。しかも、敵根拠地のすぐ傍、徒歩一日だ。

当然、地理に詳しく、補給も容易い。援軍も呼べる。というか、まだ後方には予備兵力が五千はいるだろう。つまり、四万——自軍の三倍以上と見積もるべきかもしれない（全軍を出してこないのは、数が多過ぎて指揮が困難になる事に加え、三万五千もあれば、十分という判断に違いない）。

逆に、こちらはメディオラムヌ（現ナポリ）まで四十日かかる。補給も援軍も困難だ。一応近くにはバルバティウス軍三万がいたものの、これを友軍と見做すのはもう無理である。敵に寝返らないでいてくれる事だけを救いと考えねばならない（バルバティウスがあたかも通敵しているかのようにローマ側の船舶や糧秣を焼いているとの未確認情報もあるが、さすがにこれは虚報だろう）。

……よくも、ここまで不利な条件を積み上げられるものである。

ただ、少数精鋭であった事が幸いし、今回も軽挙妄動がなかった。

皇帝ユリアヌス当人を除いて。

そう、ユリアヌスはふらふらと陣中を歩いていた。元々、身なりが質素で威厳に欠ける。だから、皇帝の証たる紅の外套さえ外してしまえば、こんな芸当も可能なのだ。

何より、じっとしていらなかった。つまり、落ち着きのない子供と同じである。

後世、ユリアヌスは肯定派否定派双方から、胡散臭い伝説を幾つも並べられる。しかし、

『質素』『勤勉』『聡明』——そして、『軽率』は万人が口を揃えるところだった。

ユリアヌスは朦朧と歩き続け、しかし、反射的にその身を隠した。

アンミアヌスとセヴェルスの姿を目にしたからだ。

「三万五千でげす。予測通りでげすな」

「どうやら、セヴェルスは改めて敵の総数を調べていたらしい。しかし、衝撃の一言を続ける。」「けど、奇妙でげすな。女子供がほとんどいないでげす」

——ああああああ、やつぱり……！！

ユリアヌスは内心絶叫した。敵は三万五千。蛮族にしては少数だと思っていたのだ。

つまり、あちらも今回は少数精鋭なのだ。元々蛮族の女子供は、戦場における兵站と観戦と予備兵力を兼ねている（なお、蛮族に老人はほとんどいない。理由はお察しいただきたい）。つまり、仮に敵数が三万五千でも、純戦闘員は二万程度という事もしばしばだった。だから、ローマ軍は数では勝る蛮族軍に拮抗しえたのだ。

しかし、今回は違う。ユリアヌスも薄々気づいていたように、蛮族軍もローマ軍のように、決戦兵力を揃えてきたのだ。これは状況がさらに不利になったというだけではない（いやいや、それだけでも重大問題なのだが）。すなわち——、

「やはり彼らも我々から学んでいるのだ」

とアンミアヌスはユリアヌスと同じ結論に至っていた。

「防具にも金属が増えていきますな。……一昔前は蛮族なぞ、革の盾がせいぜいだったのに」

「それもゲルマンが進歩している証だろうな」

（話の筋とは外れるが、ユリアヌスは『……アンミアヌス、元々年上なセヴェルスが今や

マギステル・エネイテム

騎兵長官で階級も上なんだ。ちゃんと敬語を使ってよ。いや、セヴェルスもセヴェルスだ。

君が序列を守らせなければ、下の者に示しつかないだろう？』と思った。だが、『とはいえ、ずっと下働きだったセヴェルスがいきなり権高になるのは難しいだろうな……。僕も似た苦労したし。時々トゥルートやサルステイウス相手に敬語になっちゃうし。私的な領域に限れば、黙認するか』とも考えた）

「時々思うよ。キリスト教徒の言う《神の意志》とは《歴史の必然》を意味するのではないか？——と」

アンミアヌスの言葉はユリアヌスにも素直に受け入れられた。

元々、ユリアヌスはマルクス・アウレリウス帝に私淑しており、かの哲人皇帝はストア派の代表格だ。当然、ユリアヌスはストア派哲学にも、その決定論的側面にも理解がある。

一方でセヴェルスは現実論だけを述べる。

「敵が知識や技術を吸収し、進歩を続ける以上、いずれ追い越されると？」

「……第二次ポエニ戦争の頃はよかったな」アンミアヌスは直接の返答を避けた。「あの時も、積極派と消極派はいた。プレブス 平民と貴族パトリキの対立もあった。だが、ローマという同じ船に乗っている。そんな一体感があつた。政争であつて、党争ではなかつた。共和制が機能するはずさ」

約五百年前のポエニ戦争の頃、ローマは若く、敵国カタルゴは老いていた。当時のローマも、カタルゴの勇将ハンニバルへの対応で、積極派と消極派に分かれていた。が、その断絶はカタルゴや今のローマ程ではなかつた。

例えば、反対を押し切つて出撃した積極派が窮地に陥れば、消極派も身を削つて救出に向かつた。また、積極派の長スピキオが消極派の長ファビウスを説き伏せる時も、まずファビウス達の功績と判断の正しさを讃え、その上で状況の変化を語つた。

あの頃のローマには国家としての一体感があつた。同じ船に乗っているという認識の共有があつた。だからこそ、立場や方法の違いがあつても、浸水があれば、その解決するため、皆が一丸となつた。

老大国カタルゴ本土は真逆だつた。カタルゴは孤立奮戦するハンニバルをほとんど支援しなかつた。だから、敗れた。

しかし、もはやローマも老いた。かつてのカタルゴと同じ問題を抱えている。

「それこそ、今のユリアヌス様はハンニバルとそっくりだ。孤立奮闘し、戦果を上げる程に、正帝は疑い、支援が遠のく。これでは勝てる戦も勝てぬよ」

この意見については、ユリアヌスも身を隠していなければ、

——いや、正帝は頑張っているはずだ。僕を支援する気もちゃんとある。

と反論したかつた。少なくとも、バルバティウスの行動は正帝の陰謀ではないはずだ。

この戦の重みはセノネスの比ではない。あの時はユリアヌスとその直属の命運がかかつていに過ぎない。だが、今回はガリア、ひいてはローマの命運にも繋がる一戦なのだ。で、ある以上、正帝が猜疑心の塊だつたとしても、下らぬたくらみを巡らす筈がない。

——何故なら、君主制の利点は、責任の所在が明白になることだからね。

国が滅びれば、その責任は最高権力者である君主（正帝）が負わねばならない。そのため、君主は保身を賭けて、国家のために努力をする。例えば、元老院出身の皇帝には名君も多い。だが、その名君も元老院の一人であつた頃はろくに仕事をしない事が多かつた。最高権力者になつて初めて、国家の安寧と自身の安全が直結するようになり、それ故に私心を抑え、国益を求めようになつただけだからだ。

今の正帝も国家の最高責任者である。だから、国家のために（非保身のために）努力をするはずだ。そして、この場合、努力とはユリアヌスを支援する事だ。

——ローマがここで負けたら、正帝自身の地位だつて危ういんだ。当然さ。

だから、この国家の危機の中、ユリアヌスに支援が来ないのならば、それは正帝本人よりもその命令を実行する宦官や官僚に問題があるのだろう。

……とはいえ、本質は変わらないかもしれない。結局は老大国の構造問題だ……。
ユリアヌスは気が滅入った。

集団責任は無責任になる。その構造が今のローマにはある。かつてのカタルゴと同じだ。正帝にしろ、その取り巻きである宦官も官僚にしろ、ユリアヌスが敗北し、ガリアが蹂躪されれば、困る。ならば、ユリアヌスを支援すべきなのだ。

だが、現在の宮廷政治ではこの単純な論理が通用しない。何故か？
「ローマという船は大きくなり過ぎたのかもしれない。船が小さい時には共有できた問題意識を今では共有できなくなっている」

アンミアヌスはユリアヌスの心中を代弁した。

「船が小さい頃は沈みそうか否かを乗客全員が把握できる。それ故、自ずと一致団結できる。だが、船が大きくなると、そうはいかない。実際、所々浸水していても沈没には直結しない。それどころか、浸水そのものが認識できなかったりする」

「……彼らには今にも攻めてきそうなあの蛮族の姿も見えねえわけですか？」

「実際、東方にはまだ余裕がある。……もともと対ペルシャ戦線でも似た構造はあったがな」

結果、危機を伝える者は危機を煽る者とされ、変革の訴えも無能故の不平不満とされる。問題を指摘された時、問題そのものの有無ではなく、それを指摘する者を貶す風潮が高まる。カタルゴやハンニバルと同じ命運を、ローマやユリアヌスは辿ろうとしている……。

ヒトは赤子として生まれる。育てば、大人になる。大きな体と力を手にする。が、その次に待っているのは、老いであり、死である。

国も同じだ。ローマは小さな国として生まれ、育ち、大きくなった。だが、大国は老大国になり、やがては老国となって滅びるしかない。

ユリアヌスは荒れ狂う濁流を人の手で押し止めようとしている気になってきた。

そんな事、出来るはずなのに。

「どういう心算だった？」

二人になった瞬間、トゥルートはシャハラザードの首根っこを掴んでいた。

「あら、トゥルート姉さま、まだ昼間だというのに……はいはい、わかりましたよ」

「……本当にわかっているのか？」

『背後の市民は？』の一言でしょ？ たしかに余計だったかなーとは思いましたよ」

「わかっているなら、何であんな事を言った?!」

背後の市民を意識しなければ、ユリアヌスは即時撤退も決断できたかもしれない。それが、

このペルシャ娘の一言で迷い苦しむ羽目になったのだ。

元々、ユリアヌスには理想に走るところがある。

例えば、ローマの兵士達が戦乱の中で、略奪や強姦をしているのを見つけたとしよう。

——分を弁えていれば、黙認。度が過ぎれば、斬首。

トゥルートのならそう考える。この時代の人間ならば、それが妥当な判断というものである。だが、ユリアヌスは違った。その兵士達に、人倫を説き、道徳を説いたのだ。軍人の責務を語り、弱者や敗者を虐げるのではなく、自らの同胞とするローマの伝統を語ったのだ。

トゥルトからすれば愚かとしか言いようがない。

そも兵士の多くは略奪や強姦が目当てで戦争に行くものだ。蛮族はそれを公言、推奨すらしている。また文明人にしたところで暗黙の権利と考えている。たしかにローマでは給料が保障されている事もあって、この手の蛮行が控えめである。だからこそ、トゥルトもローマ軍を選んだ。しかし所詮は五十歩百歩だ。

ただ——それでもなお、理想を求めるのがユリアヌスなのだ。

そんなユリアヌスに市民の存在を指摘すれば、戦術判断の妨げになるに決まっている！

しかし、シャハラザードは皮肉気に語る。

「でも、ユリアヌス様は正義を重んじられます。民草の身命を第一に考えられます。そして、そのためのローマ帝国だと本気で思っていらいっしょいます」

「だから？」

「……わたしが言わずとも遅かれ早かれ、同じ苦しみに辿り着いたかと」

あの人、わたしなんかと違って、本当に頭がいいから……と、シャハラザードは何故か唇を噛んだ。

「馬鹿馬鹿しい！」

トゥルトはシャハラザードを突き飛ばした。

どう言い返せばいいのかわからなかったからでもある。所詮、トゥルトは槍使いであり、シャハラザードは語り部でもある。口舌で勝てるはずもない。

倒れたシャハラザードは、しかし、奇妙な事を言い出した。

「……羨ましいのですか？」

「はあ？」

「彼に嫉妬しているのですかと聞いているのです」

「どういう意味だよ？」

「今回だけではありません。国家の正義、軍人の義務、皇帝の責任……そういった理想を彼が口にする度に、あなたは微笑みながらも、どこか苛立っていますよね？」

トゥルトの心臓が高鳴った。

ユリアヌスが理想を求める理由はもう知っている。ユリアヌスがそれだけこの現実が嫌いだ

からだ。

だが、それをこの阿婆擦れに教えてやる必要もない。

「……綺麗事を言う奴は、大概不幸な結果を齎すからな」

「綺麗事を成し遂げる男は、不幸を齎しますか？」

「……それで、どうして、あたしが嫉妬しなきゃいけない？」

「あなたが無能だからです。綺麗事を成し遂げられないからです」

「……！」

……トゥルートはゲルマン人に家族と故郷を蹂躪された。だから、復讐を誓った。同じ悲劇を繰り返させまいと軍人になった。だが、現実にはトゥルートがいくら戦っても無駄だった。次から次へと押し寄せるゲルマン人の撃退など、不可能だった。トゥルートの力で平和を取り戻すなど、所詮は夢物語だった。

しかし、ユリアヌスは違う。彼が来てからまだ二年も経っていない。なのに、戦局は大きく変わった。文字通りの連戦連捷。たしかに今回は苦境だ。だが、逆にここさえ切り抜ければ、ローマはゲルマン人に脅えずにすむ。ド素人がわずか二年足らずで！ 大した動機も経験もないくせに、あいつはここまでやったのだ。

立場の違いというものはある。トゥルートは一兵士だが、ユリアヌスには指揮権がある。

だが、立場が逆だったとして、トゥルートに同じ事ができるか？

認めざるを得ない。

ユリアヌスは……格が違うのだ。

「だが……それは貴様の勝手な思い込みだろう」

「……そうですね。では訂正しましょう。わたしが彼に嫉妬しています。だから、彼の破滅を心のどこかで願っています」

「……シャハラザード？」

「彼が理想のために無謀な戦いをし、結果、すべてを失うところが見たいのです。打ちひしがれた彼に言っただけです。『ほら、やっぱりこうなった。わたしは正しかった』と」

「貴様……！」

そこでシャハラザードの口調が変わった。

「国家の正義？ 軍人の義務？ 皇帝の責任？——そんなものを信じている奴は馬鹿なのよ。国家は国民を裏切るし、軍人が民衆を守るのおとぎ話の中だけ。皇帝なんて、所詮は盗賊の親玉みたいなもの。その程度の『現実』もわかってない奴は、どうしようもない馬鹿だわ。……そう思っていたのに」

だが、ユリアヌスはその『現実』を否定した。口舌ではなく、揺るがぬ結果で。「苛々するのよ。彼を見ていると。自分が無能なだけだったと思いきらされるから。……成長したんだ。大人になったんだ。そう思う事で慰めてきた自分の人生が否定されるみたいで」

バルバティウスが事実上の敵前逃亡に走ったのもそれが理由だ。
シヤハラザードはそう断定した。

彼だけではない。これまでユリアヌスを消極的に裏切った者達に、皆が皆、正帝への媚態があつたわけではない。マルケルスやバルバティウスはユリアヌスと同じ指揮権を持ちながら、何年も敗勢を続けていたのだ。忸怩たる思いがなかつたはずがないと……。
そしてシヤハラザードの双眸に狂気が宿る。

「あるいは彼のような人間こそが《救世主》なのかも……。いえ、彼のような人間こそが《救世主》^{メシヤ} 足るべきなのかも」

「……お前、あの童貞野郎に何を期待してんだ？」

「——世界の救済を」

「正気かよ？」

「あなたは違うの？ トウルート姉さま……いえ、ゲルトルト・ゲイルスケグル」

「……あたしが望んでいるのは、このガリアの救済だ。世界の救済まで、あのヘタレに背負わせるつもりはない」

「ヘタレだからこそよ。逆に聞くわ。眉一つ動かさずに人を殺せる男をあなたは《救世主》^{メシヤ} と認めるの？」

「それは……」

「そういう男を御所望なら、何人でも紹介してあげるわ。でも、わたしは嫌よ。あんな連中に救済を委ねるなんて、わたしは……嫌だ」

「シヤハラザード？」

「そうよ。ああいうヘタレ野郎こそ、《救世主》^{メシヤ} に相応しい……！」

トウルートは語り部の売女をさらに殴り飛ばした。

所詮お前はわかっていない。お前は冬山で迷っていたユリアヌスを知らない。お前は初陣で震えていたユリアヌスを知らない。

だが、あれが本当のユリアヌスなんだ。何もないとどこでもすつ転ぶドジっ子なんだ。

若き勇将、ガリアの守護者、知性と忍耐を兼ね備えた偉大なる皇帝——全部嘘だ。

でも、お前はそんな嘘をつき始めた頃のユリアヌスしか見ていない。

だから、無責任なことが言えるんだ。

本当のユリアヌスは弱虫で泣き虫で意気地なし。だけど頑張る。だから頑張る。

——あたしの弟みたいなのやつなんだ。

ユリアヌスが皇帝用の天幕に戻ると、トゥルートの寝台近くで待機していた。何故か、むすつとしてている。

「ああ、心配かけてごめん。僕はもう大丈夫。考えもまとまったから……」

「で？」 トゥルートは話を遮る。「どう攻めるんだ？」

「はい？」

「奇襲か？ 夜襲か？ 攪乱工作か？ 正面突破か？ いや、暗殺か？ まー、仕方がない。

お前が言うなら、あたしは何だってやるさ」

「君は何を……」

「ほら、皇帝陛下。あたしに命令しろよ。『僕のために戦え』ってな」

「……トゥルート、君の忠誠と戦意はわかった。感謝もするし、尊敬もする。しかし、戦局は厳しい……」

「けど、戦うんだろ？」

「いや、戦わない」

苦渋の決断に、トゥルートは眉を顰める。

「……背後の市民は？」

トゥルートはシャハラザードと同じ発言をした。

「見たろ？ あの三万五千は精鋭だ。半端な都市では防げない。拮抗しうるのは、あたしらの一万三千だけだ。そのあたしらが背を向ければ、ガリアは為す術もなく踏み躪られるぞ」

さらにトゥルートは戦略や兵站到口を出す。この手の越権行為は珍しかった。

「大体、この規模の遠征は二度も三度もできるもんじゃない。突撃馬鹿のあたしですらわかる。一度やっただけで家財政とやらは火の車なんじゃないのか？ なら、この一度で蹴りをつけるべきだろ？」

ユリアヌスは眼を逸らす。

「それは理想だよ。少しは現実を見ないと……」

次の瞬間、ユリアヌスは後ろに吹き飛んでいた。

「……っ！」

トゥルートの殴られたとわかったのは、頬の痛みと血の味ゆえである。ユリアヌスは小柄だ。長年の粗食で痩せぎすでもある。しかし、それを加味してもなお演劇じみた吹き飛び方だった。トゥルートの人外じみた拳撃には驚嘆するしかない。

「はっ、現実ね？ 現実。お前の口からそんな言葉が出るなんてね」

男装の少女はわざとらしく肩をすくめる。

「がっかりだよ。てっきりまた青臭い理想を並べて、あたしを苛々させてくれると思っていたのにさ。あーあ、がっかりだ」

「ト……トウルート、何を怒っているの？ 僕に悪いところがあつたなら、謝るし、直すよ。だから……」

今度は蹴りが飛んできた。反射的に躲したが、しなやかな足刀は大地を抉っていた。

——ちよ、直撃したら、死ぬ……？！

しかし、トウルートは下種げすな笑みを浮かべていた。

「ほら、前に言っていたる？ 徒手格闘訓練だ。つきやってやるよ」

「……い、意味がわからない」

それも二重三重にわからない。大体、ユリアヌスが理想論を説くのに対し、トウルート達は現実論で窘める事が多かったのだ。何故、現実論を説いた今回に限り、こんな目に？

「あ、そ。じゃあ、一方的にボコるから。はい決定」

そして、彼女は拳を振り上げる。ユリアヌスは恐怖から顔面を守る。すると、拳は腹に突き刺さる。ユリアヌスは痛みで蹲るものの、そのまま亀のように丸くなった。防御姿勢としては悪くない。だが、反撃は困難な格好だ。

トウルートはこれ幸いと何度も蹴りつける。何度も何度も踏み躪られる。

ケラケラと笑われながら、ユリアヌスは虐げられた。

まるで、いじめられっ子だった昔のようだ。

いや昔なら、いつも兄が助けに来てくれた。でも、もう兄はいない。助けに来てくれる者は誰もいない。

頼れるのは自分だけだ。

「理想？ 理想を言えって？ ああ言ってやるさ！」

ユリアヌスも吹っ切れた。状況がさっぱりだが、ここまでされて黙っているいわれはない。それでなくとも、戦場暮らしで気が荒くなっているのだ。

「大体、一万三千は軍団長レガートゥスが率いる規模！ 本来、司令官インペラートルが率いる規模ではない！」

——殴り合いでは勝ち目がない。組み合いに持ち込むしかない。

そう考えて、ユリアヌスは体当たりを仕掛ける。

こんな時でも頭でっかちである。勿論、本当に頭だけで考えれば、他の衛士を呼ぶべきだ。

何故なら、ユリアヌスは皇帝インペラートルなのだから。しかし、この時、ユリアヌスもその選択肢だけは除外していた。己の肉体のみで、トウルートに一矢報いようとしていた。

「各軍団長が一万を率い、それを五つ束ねた五万を司令官インペラートルである僕が指揮する！」

ユリアヌスは体当たりから、強引に片足を取る。偶然にもそれは柔道くちまたおという『朽木倒し』に近い形となった。

「あとは包囲殲滅！ それが理想さ！」

「特にあなたは見た目がゲルマンです。極端な話、『女装』して、潜入すれば……」
「あたしも昨日同じ事を言ったよ」

褥しよねの上で——というところはトゥルートも隠す。

「だが、こっちの方が勝算は高い——それが【大将】インペラートルとしての『我が君』の判断だとさ」
そう、既に互いの陣形は整っていた。

ローマもゲルマンも、互いの殲滅を目的とした会戦を選択していたのだ。

敵軍兵数三万五千。予備兵力は多数。陣形は凸型魚鱗。騎兵を前に出し、歩兵が後に続くという編成。明らかに中央突破を狙っている。

友軍兵数一万三千。予備兵力は皆無。陣形は凹型鶴翼。左右両翼が騎兵、中央本陣が歩兵という編成。こちらは包囲殲滅を狙っている。

文字通り、互いに噛み合う陣形だ。わかりやすい構図とも言える。

それだけに後者には『勝てる訳がない！』という不安があるはずだった。『兵数で劣る側が戦力分散してどうする？』という疑念があるはずだった。

しかし、兵士たちは黙々と配置についてくれた。

ユリアヌスは彼ら一人一人の顔を見渡す。

——今だけではない。

これまで何度もユリアヌスは危機に陥った。ユリアヌスはその度に混乱し、懊悩した。だが、この兵士たちは決して軽挙妄動は起こさず、ユリアヌスの決定を待ち、その上でユリアヌスの命令に従ってくれたのだ。

——マルケルスやバルバティウスとは違う。

兵達の潜在的な士気は低くない。考えてみれば、当然だ。トゥルートも言っていた通りだ。彼らは地元を荒らされている。そして、彼らは元々民草である。土と共に生きている。農民だ。いざとなれば、東方へ逃げればいいと考えている高級官僚とは訳が違う。

家族を守りたい。故郷を取り戻したい。

その思いは人一倍なのだ。

だからこそ、コロニア奪還の時も、セノネス籠城の時も、このアルゲントラトゥム決戦においても、彼らは苦難の中で戦うのだ。

——彼らこそ、僕の宝であり、僕の礎だ。彼らのために、彼らを束ねる。それが僕の義務だ。
「ここに我らはカンネーを摸倣し、ザマを再現する……！」

ユリアヌスは差し出した右手を握りしめる。

「取り戻すんだ——僕の、僕達の《パックス・ローマの平和》を！」

あの時、アンミアヌスは、言った。『やはり彼らも我々から学んでいるのだ』と。しかし、ユリアヌスなら、付け加える。『我々が彼らから学んでいるように』と。本来、ローマは農業国であり、市民兵の軍隊である。自然、騎兵は弱い。いや、弱かった。

だが、今は違う。それこそ敵であった騎馬民族をも受け容れ、その戦法技術を咀嚼吸収しているのだ。特に、今回両翼に配置された精鋭騎兵は、帝国の規律正しさと蛮族の勇猛さを兼ね備えた最強部隊といってもいい。

そして、それを率いるセヴェルスは文句なしの実力者である。

だから、ローマ両翼が綺麗に進軍していく。絵に描いたように美しい。理想的な包囲展開だ。逆に蛮族は単純愚直だった。三万五千で突撃してくる。故に恐ろしい。下手に小細工しないからこそその強さだ。彼らは余計な事を考えない。故に戦力集中の原則へ忠実なのだ。

だから、蛮族軍には凸型魚鱗陣形しかない。

反面、帝国軍は変わらず凹型鶴翼陣形のままだ。

戦力分散の愚を、あえて犯したままだ。

しかし、それでも中央の歩兵部隊は微動だにしなかった。

分散した一万三千で、集中した三万五千の敵軍を受け止めたのだ。

天上から見下ろせば、荒れ狂う濁流を人の手で押し止めているかのようだろう。

ユリアヌスは叱咤激励し、兵士たちは奮戦敢闘し、そして、思う。

――僕達はできるかもしれない。

歴史の必然も、自然の摂理も、神の意志すらも、人の手で曲げられるかもしれない。

ユリアヌスは隠し持っていた十字架を左手で握りしめる。

「神よ。たとえ滅びが運命さだめだとしても、僕らは抗うぞ……！」

――追い付けない！！

トゥルートは泣きたい気分だった。

当然ながら、一万三千（をさらに分散させた兵力）で、三万五千を受け止めるには無理がある。だから、ユリアヌスは前線を駆け巡り、矢継ぎ早に指示を出し続けた。どこかの部隊に少し

でも余裕ができれば、苦戦している部隊への救援に向かうように命令を出す。あるいはその逆、苦戦する部隊に、余裕がある部隊から兵士を回す命令を出す。

元々、万を超える兵士同士が激突した場合、全員が全員、戦闘に参加し続けるわけではない。どうしても最前線に辿りつけない『遊兵』ができる。三万五千の蛮族ならば、一度に最前線で戦える兵士は、せいぜい一万程度だったりする。

では、逆に一万三千の兵士の『遊兵率』を二割に抑えられれば？

一万三千の『非遊兵率』を八割にまで引き上げれば？

蛮族の実動兵力一万を超えられる！

……とはいえ、常識的に考えれば、これも机上の空論というべきだろう。

まず兵士が狂乱の戦場で、適切な配置に動き続けねばならない。そもそも、遊兵には消耗を抑え、休息を得て、回復を行う役割がある。これをなくす事は兵士への負担を増やす事に繋がる。

それこそ、一人で五人分戦い続ける覚悟がいる。

まして……、

指揮官は常に変化し続ける戦況の中、最短最速で最適な指示を出し続けねばならない。

人間業ではない。

だが、皇帝ユリアヌスはそれを成し遂げつつあった。

しかし、その結果、指示を出すために前線を駆け巡る皇帝に、筆頭衛士のトゥルートが追い付けないという奇天烈な現象が起きていたのだ。

「あいつは！ 去年までは！ ただ馬に乗るだけでも！ おっかなびっくりだったんぞ！」

それが今ではテキパキと命令を放ちつつ、縦横無尽に戦場を駆け巡っている。

対するトゥルートはそんなユリアヌスを……、

「畜生っ！ とうとう見失った……」

思わず、自嘲した。皇帝ユリアヌスの影は遙か遠くに去って行く。

——「トゥルート、君を【^{プリムス・リットル}筆頭衛士】に任命します。決して僕の傍を離れぬよう」

一年前のあの命令をトゥルートは守れなかった。

——昨夜の取っ組み合い……ユリアヌスに自信を付けさせるために、あたしは手を抜いた。

だが、全力でやりあったら、あたしは勝てたのか？

トゥルートの迷いに気付いたのか、馬が自ずと足を止める。

ところが、そんなトゥルートに敵の矢も届かない。ローマ歩兵は完璧に機能し、敵の攻撃を遮断していたからだ。

さすがに兵士には『戦場で棒立ち？』『こいつ、何やっているんだ？』と胡乱な目を向けてくる者もいた。だが、すぐさま『ん、皇帝陛下直属の衛士か？』『なら、特命か何かがあるのだらう』『俺は俺は義務を果たすのみ』という顔になって、前線へ向かう。

実際、トゥルルトはただ棒立ちしているだけだったのに……。

それは組織への盲従ではない。システムへの信頼だ。

荒廃した世界しか知らないトゥルルトには想像もつかない感覚だった。戦場で背中を任せ合える相棒というのはわかる。しかし、そこにあつたのは、顔を見た事がない相手であっても、同じ社会の構成する仲間であれば、まずは協調すべきという行動原理であつた。

——これがローマの力、文明の力、ユリアヌスの力……。

今なら、わかる。ゲルマンもトゥルルトも野蛮人だ。野蛮人は勇猛ではある。個々の武では文明人に勝る。今回のように蛮族が精鋭ならば、尚の事。しかし、伍を組んだ兵士には劣る。そしてそれは万を超えた兵士同士でも同じなのだ。

今なら、わかる。ゲルマンの足並みは揃っていない。強者は敵を倒して前に進むが、弱者はそこへ追い付けない。足並みが乱れる。攻撃にアラができる。防御にムラが出来る。これではせつかく精強な戦士であっても、その遊兵率が高まり、実動率が低くなる。

ユリアヌスの下で、精密機械のように動き続けるローマ軍団に勝てるはずもない。

「ちよっと待ってよ。やっと知り合いに会えたんだから」

シャハラザードがそう言って駆け寄ってきた。

こいつ、戦闘中は何やっている？——と思つたが、それはトゥルルトも同じである。結局、歯車になれない娘二人が出会つたということだ。

そして、その余裕がローマ陣営にはあつた。既にローマは騎兵による両翼が包囲を閉じつつある。なのに、蛮族軍は中央歩兵すら突破できないのだ。

「ふん、これが教科書通りとやらなんだろ？ ……ローマの勝ちだ」

「教科書通りですって？ あなたって、本当に馬鹿ね！」

シャハラザードは日頃の淑美をかなぐり捨てていた。ペルシャもローマと同じ文明の産物である。その語り部であるシャハラザードは当然博識である。ところが、そんなシャハラザードから見てもこの戦捷は異様らしい。

『包囲すれば、殲滅できる』って、兵法書とやらに書いてあるんだろう。そして、その通りローマは勝つ。文句なし。頭でっかちのユリアヌスらしい勝ち方だ」

「……あなたは彼の価値を理解していないわ。ああつ、こんなことなら、何が何でも抱かれておくべきだった」

トゥルルトは『抱かれる』という言葉に頬が染まるのを自覚した。だが、シャハラザードはそれを見逃す。それ程、シャハラザードは興奮していた。

「いい事？ 今、ローマは少数で多数を包囲殲滅しているのよ。教科書にはこう書いてあるわ

——『ありえない。絶対失敗する』」

「はぁ？ でも、神君ユリウス・カエサルはこのガリアで何度も『少数で多数を倒す』を成し遂げているんだろ？」

「あれは政治的事情から、カエサルが敵数を誇張して報告している場合がほとんどよ。無論、確かに『少数で多数を倒す』事に成功したと思われる例も幾つかあるわ。でも、そういう時、カエサルは包囲殲滅なんて狙っていない」

電撃的に敵の弱点を攻める事で、敵が数の優位を發揮させる前に、指揮系統を崩壊させ、敵全体を『敗走』に追い込んでいただけだ。

これも容易くはない。カエサルの伝説的な指揮能力と天才的な戦術戦略の結果である。

だが、あくまでも『敗走』させているだけだ。『殲滅』しているわけではない。極言すれば、個人規模による暗殺を部隊規模でやっているだけだ。ユリアヌスもコロニア奪還の時に同じ事をやっている。無茶ではあるが、無理ではない。

「五賢帝時代だって、この手の包囲殲滅を狙う時は敵よりも多くの——それこそ、当時絶頂を極めていたローマの兵員輸送能力を全力稼働させ、敵に倍する兵数を用意したわ」

「……そりゃ、頭数は多い方がいいだろうけど……。そんな事をしてたら、今度は補給が追いつかなくなる危険があるだろ？」

「そうよ。でもね、包囲殲滅を狙う時っていうのは、その危険を冒してでも、兵数を確保する必要があるので」

「何で？」

「包囲が完成すれば、勝てる。でも、包囲が完成するまでの間、戦力を分散させる事になる。

そこを各個撃破されるおそれ虞があるもの」

「????」

「あー、あなたってば、『一、二、三、たくさん』の人だったわね。わたしが悪かったわ」

いや、さすがにそこまで——とトゥルートは言い返そうとした。しかし、シャハラザードは聞く耳持たずに説明を始める（こんなところはユリアヌスと五十歩百歩だ）。

「まず、味方が三人、敵方が二人の戦いを頭に浮かべて。で、敵味方共に一人当たりの強さは同じだと仮定。この時、味方三人が包囲に成功し、正面、右側面、左側面から、敵二人に一斉攻撃をかけたとする。すると味方は大勝利。これならわかるわね？」

「ああ」

「でも、味方が包囲網を完成させる前に、敵が正面の一人に二人がかりで集中攻撃を仕掛けてきたら？ この場合、左右に展開した味方の援軍は間に合わないとしたら？」

「……味方は一人で敵が二人、やられてしまうな」

「その後、左右に分かれて一人孤立している味方に、同じ要領で二人がかりの集中攻撃をしかけたら？」

「今度も味方は一人で敵が二人、またやられてしまうな」そこでトゥルースは気付く。「待てよ。これだと、順番はどうあれ、包囲しようとした側は必ず負けないか？」

「そう。包囲というのはそれが完成するまでは戦力の分散に他ならず、各個撃破の餌食になり易い。勿論、包囲が完成すれば、状況は逆転するけど、そこまでは常に博打なの」

「……ユリアヌスがこの作戦を躊躇った理由がトゥルースにもようやくわかってきた。」

「しかもこれは味方が三で、敵が二と、数では上回っている話よ。それでも、包囲する側は危うい。だから、五賢帝時代でも必ず多めの兵力を用意して挑んだ。戦力を分散している時に集中攻撃されても、耐えられるように」

「シャハラザードは興奮して言葉を重ねる。」

「さつき彼は『カンネーを模倣し、ザマを再現する』と叫んだけどね。とんでもない謙遜だわ。この戦術を考案したハンニバル・バルカやそれを普遍化したスピキオ・アフリカヌスも、最低でも敵と同数近い兵数が用意できなければ、こんな危うい賭けには挑まなかった。失敗するとわかっていたんでしょね。だからこそ、ハンニバルもスピキオも名将と呼ばれている」

「……じゃあ、成功したユリアヌスは何なんだよ？」

「ハンニバルやスピキオ以上の軍神よ。……戦闘に話を限れば、既にカエサルどころか、あのアレクサンドロスの領域にある。わたしの知る限り、少数で多数を、それも倍以上を包囲殲滅なんていう例は古今東西皆無よ。皇帝ユリアヌス陛下は人類史上初の偉業を成し遂げたの……！」

「シャハラザードの比喩は正直よくわからなかった。具体例をあげられても、知識がなければ、意味不明だ。また、教養人らしく、形而上学に偏る傾向がある。」

「ただ、シャハラザード類は紅潮していた。それは彼女にとっても、ユリアヌスが真に特別となった証だろう。」

その時、ローマ軍団から、歓声が上がった。

前を見れば、敵軍が退いていく。こうなると蛮族は脆い。

ただ老兵が一人、戦陣の前で、重槍を構え、残っていた。シャハラザードが嘲笑う。

「あははっ、あんな老兵をしんがり殿なんて……本当にもう蛮族はおしまいなのね」

「違う……あの重槍はクノドマルだ」

「え、クノドマルって、たしか……」

「アラマンニ部族の長、ゲルマン民族の総司令官だよ」

ローマで言えば、【インペラートル皇帝】の地位にある老将だ。

そんな男が同胞を守るため、自ら盾となっているのだ。

「え、ちよつと待って？ 何であなたそんな奴を知っているの？」
トウルートは返答もせず、単騎で駆けた。

「姉としては、ここで一つ、弟にいいところを見せとかないとな！！」

——で叫ぶ。
祖名でもある【槍戦】の間合いに入り込んだトウルートはよく通る高い——本来の女の声

「アラマンニの長クノドマルよっ！」

ゲルマン語を使った甲斐があった。あるいは金髪の容姿と単騎が幸いしたか……。いずれにせよ、敵陣に動揺が走り、矢が止まる。

「我はゲイル・スケグルの末娘、ゲルトルト！ 主神オーディンの御名において、一騎討ちを申し込むっ！ 貴君が我が父母と弟妹の仇であるが故に……！」

【槍乙女】だと？ 何故、そのような娘子がローマ軍に？

「我が真名を明かした故、お察し頂きたい。死せる戦士よ」

老将は自ら殿を務めていた。憎悪すべき敵手であるが、尊敬すべき勇者でもあった。だからこそ、勝敗の行方を仄めしたのだ。

彼の方でも理解したらしい。しばらく、俯いた後、高らかに宣言する。

「いいだろう。アラマンニの長クノドマル……その決闘を受けよう。死神たる戦乙女よ……！」

実を言えば、愛槍は細い【擲槍】だった。その名の通り、本来は投げる槍であり、撃ち合う槍ではない。しかし、少女の細腕である事と、技が産み出す【力強さ】に賭けて、初潮が来る前から使い続けていた。

しかし、これでクノドマルの重槍と撃ち合う訳にはいかない。

クノドマルは八つ裂きにしても足りぬ仇である。故にこそ、彼の武勇は熟知している。その重槍はかつての僭称皇帝マグネンティウスの実弟を打ち破った。その上でなお、率先垂範する事で、割拠志向の強いゲルマンという野蠻を纏め上げた。折紙付の強者である。

こんなか細い擲槍など、一合で弾き飛ばされるに違いない。

その時、風が吹く。

金色の髪が解ける。棚引く様が女の形を成す。

復讐を誓い、男装を纏って以来、決して解けなかった髪が解けたのだ。摩訶不思議である。しかし、理由などどうでもよかった。

心臓が高鳴る。動悸が早まる。後から考えれば、それは二拍三拍の事に過ぎなかったはずだ。だが、その数拍が永遠に思えるほどに間延びする。

だから、見えるのだ。クノマドルが振り下ろす重槍の切っ先ですら、はっきりと。

感覚の拡張、認識の最適——ユリアヌス達が【魂エクスタクシスの脱離】と呼ぶ恍惚が心身をしろしめす。それこそプラトン『パイドン』で、ソクラテスに「何かを純粹に見ようとするとするなら、肉体から離れて、魂そのものによって、ものそのものを見なければならぬ」と語らせたという。

だから、見えるのだ。見えるはずない敵手の筋肉の躍動一つまで。その意図する先までも。その先読みは反応というよりも【超反応】——未来予知と呼べる領域に到達する。

右手の槍を生贄に、左手の指先を鋭く揃える。

クノマドルは重槍にて、トゥルートの擲槍を弾き飛ばす。

老将は笑う。クノマドルにすれば、理想的な展開だったのだろう。少女の武装を打ち払ったのだから。

だが、少女の右手は固かった。少女の左手は長く伸びる。

細腕が繰り出す、しかし、最適最速の貫手ぬきてである。

左手は手刀となって、真の槍を成す。

老将の首を貫く！

そして、脊髄及び神経気道血管を纏めて握る。文字通り、相手の命を握り締めている。そう、ほんの少し指先に力を込めれば、憎むべき仇の命は握り潰せる。

「……なるほど、ゲルトルト——あの時の娘か……」

クノマドルはそう言った。

「……殺せ」

生死を敵に委ねた上でこの発言だ。蛮族の長たる豪胆さを如実に示している。同時にそれは今の今まで弟と妹の事を忘れていた事に他ならない。おそらくは、似たような事を数え切れぬほど繰り返してきたのだろう。しかし、

「断る」

「……翺って殺さねば、気が済まぬか？」

「違う。いや、無論翺りたくはある」そこでトゥルトはラテン語に切り替えた。「しかし、今のあたしはゲイルスケグルの末娘ゲルトルトではない。ローマ皇帝ユリアヌス陛下の筆頭衛士トゥルトだ」

そして、トゥルトはユリアヌスが殺生を好まぬ事は知っている。

野蛮と、その象徴たるクノマドルやゲルトルトを嫌う事を知っているのだ。

こうして——。

アルゲントラトゥム会戦はローマの勝利に終わった。

しかし、シャハラザードはその職務を天恵の様にありがたがっていた。さすがにペルシャ人、しかも間諜らしき娘である以上、書類上は幾つかの偽名を用いていたが、それでも全力で取り組んでいた。この返答一つにしても、まるで、憧れの貴人から声をかけられた奴隷女である。

とはいえ、このシャハラザードの態度も、後から考えれば、無理なからぬ話だろう。

この時、既にユリアヌスの戦術眼と用兵力は貴人というより神仙の領域だった。すなわち、兵力展開はすべてユリアヌスの目算通りに進み、フランク族はその神速の行軍を前に成す術もなかった。結果、勇猛果敢なはずのフランク族が一戦も交えずに降伏するのだ。

だから、ユリアヌスは内政へ重点を移し、書類仕事に挑む事にしたらしい。

——まあ、あたしが口を挟める話でもないか……。

トゥルートはしんみりしながら思う。

実際、内政分野についてはユリアヌス自身に予備知識がある。故に比較的円滑である。逆にトゥルートは槍働きしか能がない。軍隊生活は長いから、実務作業については助言できるが、それもユリアヌスがこの三年でほぼ吸収済みの事柄だろう。

「とりあえず、宮廷関係費を半分にして、救貧法予算を二倍にしよう！」

……だからというべきか、ユリアヌスは子供のように革命的な事を言いやがった。

トゥルートが恐る恐る常識人サルステイウスを見る。想像通り、彼は絶句していた。一応、「よいのですか？」と尋ねてみると……。

「わ、若者らしくていいではないか……」

サルステイウスは冷や汗を流しながら、かろうじてユリアヌスを擁護した。だが、さすがに今回は余裕がない。当然だろう。ユリアヌスが大胆な理想を唱えるのは毎度の事だが、それを現実の政策としてやり遂げるのはサルステイウスたち実務官僚なのだ。

トゥルートは——こりゃあ、頭が痛いはず——と同情していたが、サルステイウスには別の思惑もあるらしい。

「いや、しかし……実際悪いとも言切れないのだ。私はもうこの歳だから、大胆な改革には躊躇いが出る。が、ユリアヌス様のような未来ある若者ならば、避けて通れない道だろう」

「……と言いますと？」

「元々、この百年で宮廷関係費は膨らみ過ぎた。東方的な専制君主制による典型的な弊害だ。遅かれ早かれ、大鉦を振るわねばならなかった……」

サルステイウスは渋い顔をますます渋くする。

——そういや、このオツサン、元々は財務官僚だったな。

トゥルートは久々にサルステイウスの前歴を思い出した。すると今度はサルステイウスの方から補足する。

「お前にはこう言えばわかるかな？ ——今の正帝コンスタンティウス二世陛下が抱えている
 皇宮使用人経費は、全ローマ軍団にかかる経費を、上回っている」

「え？」

一瞬、トゥルートはサルステイウスが何を言っているのか分からなかった。しかし、
 「じゃ、じゃあ、あたしらの苦労はなんなんですか！？」

すぐにトゥルートは口調が乱れるほど赫怒した。根が単純なので主張までもが一変した。
 「その金を前線に回してもらえれば、蛮族も容易く一掃できる！ それだけじゃない。戦場で
 略奪が流行るのも、元をただせば、給料の未払いが続いて、略奪しなけりや餓死するからです。
 それでも略奪は略奪として……」

「裁かねばならないユリアヌス様は、少なくとも私やお前よりは辛い」

「……」

「ましてや、それだけの宮廷費用を使っている正帝はユリアヌス様にとっては叔父も同じだ。
 ならば、せめて自分の宮廷関係費ぐらいは削っておきたいとお考えなのだろう」

意味があるのか？ ——とトゥルートは思った。

なるほど、ユリアヌスが自分の宮廷関係費を削れば、それだけ財政は楽になるだろう。そも
 ユリアヌスは宮廷にいるよりも戦場を巡っている時間の方が長い。元々、無駄な費用である。
 しかし、根本的にユリアヌスが使っている経費はたかが知れているのだ。身なりが粗末なのは
 繰り返し述べた通り。食事も麦粥ブルスに醬油ガラムをかけて満足している。寝る時も副帝カエサルの外套に包まる
 が、その下は地べたという事は多い。唯一の贅沢は読書だが……これを贅沢にしてしまうと、
 酒と肉が大好きなトゥルートはどうなる？

結局、東側で大量に金を垂れ流している正帝が……。

「ああ、言っておくが、正帝コンスタンティウス二世陛下のやり方に理がないわけでもない
 ぞ」

サルステイウスは突然正帝弁護に回った。トゥルートの内面を読みとったのかもしれない。
 曰く、贅沢には需要と雇用を喚起する側面があり、経済が発達している東側では必要な部分も
 ある。実際、そうして発達した経済の結果、時々、東側はこのガリアへ麦を援助できるのだと
 いう。

「……たしかに麦はありがたいですがね。その経済とやらも《平和》パイクスあつてのものでしよ
 う？」

「軍人の発想だな」

「すみませんね。突撃馬鹿なもんで……って、前にもやりませんでした？ このやり取り？」
 「ああ、もうあれから三年か」サルステイウスは懐かしむ。「しかし、あの頃はお前も言っ
 いただろう。人の上に立つなら権威が必要なのだ。そして、権威を演出するには、豪華な服、
 豪華な冠、派手な取り巻き——とどのつまりは金を使うのが一番なのだよ」

「あれはあたしが間違っていました。結果さえ示せば、権威など後からついてきます」
「ほう、意見が真逆になったな……惚れたか？」

トゥルートの焦った。考えてみれば、この男には心を許している。だからこそ、注意が疎かになっている。ばれているのか？ あるいはばれている上で泳がされているのか？

「——いずれにせよ、誰もがユリアヌス様のようになれるわけではないのだよ」

トゥルートの迷っていた。だから、このサルステイウスの箴言を軽んじてしまった。

「す、すみません！」

そこでシャハラザードが突然大声を上げた。そして、ユリアヌスに問いかける。

「そもそも『救貧法』ってなんですか？」

どうやら、翻訳の問題らしい——とシャハラザード以外の三名が苦笑した。大方、東方では『救貧法』に相当する法律の名が微妙に異なるのだろう。ならば、東方娘のシャハラザードが理解できないのも無理はない。そして、ユリアヌスは空気を読めないで、シャハラザードの混乱に気付かないまま、話を進めてしまった。そんなところか。

ユリアヌスも反省したらしい。相変わらず文人的な婉曲さだったが、シャハラザードへ助け船を出す。

「救貧法についてはペルシャにも似たような法律はあると思うよ。むしろ、なきやおかしい。文明国であるなら、あってしかるべきだ。えと、《鰥寡孤独》だっけ？ この四者はペルシャよりもさらに東でも国家の保護の下にあるというじゃないか」

「あ、『老而无妻曰鰥、老而无夫曰寡、老而无子曰獨、幼而无父曰孤。此四者、天下之窮民而无告者。文王發政施仁、必先斯四者』——『老いて妻無きを鰥と曰ひ、老いて夫無きを寡と曰ひ、老いて子無きを獨（独）と曰ひ、幼くして父無きを孤と曰ふ。此の四者、天下の窮民にして告ぐる無き者なり。文王は政を發（発）して仁を施すに、必ず斯の四者を先とす』ですね」
「そうそう。【孟子】だっけ？ 君の話から聞いた東方説話でも、特に感慨深いから、覚えていたんだー」

ユリアヌスはシャハラザードを慰めた。シャハラザードはシャハラザードで翻訳完了する。「そして、この《鰥寡孤独》のような社会的弱者への救済措置こそが『救貧法』であると——理解しました。また、ご推察通りです。ペルシャにも似た法律はありますね」

シャハラザードはこんこんと己の頭を叩く。

「察しが悪くてすみません。ローマと言えば、『パンとサーカス』の印象が強かったので……」

「それは昔の話。今では『本当に困っている人を助ける』制度になっているから」
ユリアヌスが今度はトゥルートの視線を向ける。

「ね、トゥルート？」

「ん、ああ、そうらしいな」

うっかり空返事になってしまった。するとユリアヌスは怪訝な顔をした。

「あれ、君は戦災孤児だったんだよね？ ばっちり救貧法の対象だったと思うんだけど？」

「……孤『児』って言っても、十歳だったけどな」

女は初潮が来れば、もう大人——という感覚のトゥルートからすれば、『児』と呼ばれると、ピンとこない。

しかし、ユリアヌスはますます首を傾げる。

「でも、戦争の犠牲者で、身寄りもなかったんだらう？」

それが救貧法の対象にならないのはおかしい——と言いたいらしい。

トゥルートは恥を忍んで、当時の実情を一部開陳する。

「いや、それがあたし、読み書き苦手だからさ。役所にツテもなかったし、教会に知り合いもいなかったし」

だが、ユリアヌスは顔をしかめる。

「へー。……って、それ、おかしくない？」

ユリアヌスは突然「極秘で現場視察に出る！」と言い出した。

選ばされたのは、皇帝ユリアヌス自身、筆頭衛士トゥルート、騎兵長官セヴェルスの三名だ。

何度か述べたが、ユリアヌスはみずばらしい恰好させたら、天下一品である。

トゥルートも『女装』して、弱弱い態度を取らせれば、か弱い乙女に見えなくもない。

セヴェルスにいたっては真正銘の老体である。

……つまりはそういう事らしい。この三名なら身分を偽って、救貧法の実態を調査し易いという寸法らしい。

だからと言って、皇帝自ら——という事で、サルステイウスの頭痛の種は甚だ増えたものの、結局は許可された。不本意ながらもユリアヌスのやり方には慣れつつあったし、トゥルートとセヴェルスがいれば、護衛も十分でもある。

この三人の街歩きは様々な挿話に彩られた珍道中だった。

そんなこんなで、救貧法の給付役所に辿り着く。

救貧法担当の役人は三人をじろじろと見た。

ユリアヌスは賤民にしか見えないし、トゥルートは女性にしか見えないし、セヴェルスは老人にしか見えない。シャハラザードやサルステイウスと違って、ユリアヌスが高貴さとは無縁なのが幸いした。実際の社会的地位に反して、救貧法対象者と認めてもらえたらしい。

「では、この書類とこの書類とこの書類を書いて下さい」と、役人が複数の書類を提示する。

「えっと、これ書かないと貰えないんですかー？」

「救貧法は『本当に困っている人を助ける』制度。よって、本当に困っている事を書面で証明せねばならないのです」

「なるほどー」

ユリアヌスのわざとらしい応答がなんとなくトゥルートの癪に障った。

「ま、ユリアヌスにすれば、自分の領地で法律が厳正に運用されていたんだ。嬉しくないわけがないか……」

トゥルートは自分に言い聞かせ、提示された書類に向かう。

「……だがこれは……難しい。」

自分が天涯孤独な十歳少女だった頃、救貧法受給を諦めた思い出が甦る。

『読み書き苦手だからさ。役所にツテもなかったし、教会に知り合いもいなかったし』

あの台詞に嘘はない。トゥルートは半文盲だ。読み書きが全くできないわけではないものの、役人の提示する書類を過不足なく仕上げられる程ではない。

——救貧法は『本当に困っている人を助ける』制度。

この役人の言葉にも間違いはない。だが、

——よって、本当に困っている事を書面で証明せねばならない

と言われても、トゥルートはろくに教育を受けていない。書面に記す技術に欠けるのだ。

十年前も同じ理由で断念した。しかし、トゥルートもこの十年で成長した。それは槍の腕と背丈と胸と尻だけではない。ローマ軍では情報伝達の必要から、簡単な読み書きを教えている（全盛期なら、測量や建築の技術まで完璧に叩き込まれたぐらいだ）。だから、十年前と違い、トゥルートも何とか筆を動かせる。

「……む、むう……難しいでげすなあ」

と、セヴェルスも隣で脂汗を流しながら、ゆっくりと筆を動かしている。

トゥルートは改めてこの老人に親近感を抱いた。セヴェルスもまともな教育を受けていない事は想像に難くない。今や騎兵長官のセヴェルス翁であるが、言わば『猛将』で、間違っても『知将』ではない。いや、その辺りはトゥルートも似たり寄ったりだが、それこそトゥルートと同じ理由で、完全な文盲でもないらしい。

だがそれでも、役人用語はわかりにくい。少なくとも、軍隊で必要とされる用語とは違う。進路は西か東か、食料はあるのかないのか、敵数は百か千か——軍隊で習うのはそんな明快な言葉だ。だが、役人用語はまるで違う。現代日本で言えば、トゥルート達軍人は理系の論理で動いており、この役人用語は文系の理屈で成り立っている。

そんな中、ユリアヌスはさっさと席を立った。

「できたー！ って、あれー？ トウルートまだなのー？ 何なら手伝おっかー？」
——こいつ、殴りてえー！

さすがに文人肌のユリアヌスはさっさと仕上げたらしい。トウルートが内心憤っていると、「そこ、人のちよっかいをかけない。でき上がったら、こちらへ見せに来なさい」「はーい」と書類を見せに行く。すると、

「む……やや冗長だが、きちんと仕上がっているな」

役人はそう言って、ユリアヌスに銀貨を渡した。

「わーい」

喜ぶユリアヌスがムカついたので、トウルートも立ち上がる。自信はないが、ちゃっちゃと仕上げた書類を見せに行く。

「これは……いくらなんでも杜撰すぎる。これでは『本当に困っている』とは認められないな」

役人はそう言って、トウルートを突き返した。

「……ちっ」

トウルートにも杜撰という自覚はあった。やむをえず、舌打ちして書き直しを始める。しばらく、沈黙のまま、かなりの時が過ぎる。そして、

「よし……でげす」

セヴェルス翁が立ち上がった。ユリアヌスに比べ随分と遅れたが、トウルートが横目で見た限り、その書類はよく出来ている。考えてみれば、セヴェルスも長官職だ。いかに不得手でも、書類仕事はこなしているはずだ。

しかし……、

「あー、お爺さん。悪いけど、これは認められない。よくできているが、ここの書式が違う」
役人はそう言って、セヴェルスも突き返した。

「ちよつと待って」ユリアヌスは強引に割り込んで、その書類に目を通す。そして、抗議する。
「なんだ。よくできているじゃないか」

「だから、よくできているとは言っている。が、書式が違う以上、認めるわけにはいかない」
役人は権高に言った。「大体、君は何だね？ 先程から、人にちよっかいばかり……」

「僕の正体は君の職務とは関係ない。また、セヴェルスの文章が書式に忠実でないのも事実だ。いつものことだからね。だが、大意を伝えるには十分な出来であるのも、また、いつものこと

——困窮の訴えとしては認められるべきだ」

「だから、駄目だとも言っていない。ただ、書式に則って書き直せと言っている」

「しかし、相手は高齢者だよ。高齢者に対し、何度も書き直しをさせるのはいかなものか？」

ユリアヌスの頭に血が上りつつあった。こいつはそれなりに感情的なのだ。

「おいつ、ユリアヌス。落ち着けて」

トゥルートの慌てて止めに入る。

そこに「何だ？ 騒がしいな」と別の役人がやってきた。そして、

「お、可愛い娘ちゃん発見」

と二人目の役人は好色な視線をトゥルートに向けた。

トゥルートは自分が『女装』している事を思い出す。日頃束ねている長い髪が露わになっているのだ。男が寄ってくるのはむしろ必然だった。

嫌な予感そのままに、二人目の役人はトゥルートの書類に手を伸ばした。彼は目を通した後、おおよその事情を察したらしい。優しさ半分と下心半分で言う。

「御嬢さん、こういう時はこの書類のここを直せばいいんだ。あ、俺が代筆しようか？」

一人目の役人が「おい…それは…」と言いかける。

「いいじゃねえかよ。臨機応変な現場の対応ってやつさ。それにこんな綺麗な女の子、放っておいたら、襲われちまうぜ？ 治安維持の観点から、優先的に救済…」

だが、ユリアヌスの声が二人目の役人の声を遮る。しかも今度は明確な怒りの声だった。

「Περμένετε! Ένας γέρος Χάρις να λαμβάνει τις παροχές, αν θα πάρουν τα επιδόματα εάν ομορφή κοπέλα! (待て！ 男の老人は給付を受けられず、美しい少女は給付をもらえるのか！)」

「ユリアヌス、落ち着け。ギリシャ語になってる…！」

こうなるとてんやわんやである。その役所では始末に負えなくなった。

「ああもう、そんなに飢えているなら、あつらへ行けばいい！」

一人目の役人は地団駄を踏み、そしてその街の教会を指差した。

「教会では『キリストの肉』が貰える！ ここで騒ぎたてるよりは確実だ！」

キリストの十字架を掲げる教会では、たしかに貧民へパンが配られていた。

「こんなの間違っている！」

ユリアヌスは宮廷に戻ってから憤っていた。

「第一、僕が真っ先に給付を受けられる事自体がおかしい！」

これはユリアヌスが貧困ではないという意味ではない。ユリアヌスが最も適切な書類を提出できたのなら、それはそれだけの文章作成能力がある証である。そんな男なら、救貧法の助けなど借りずとも民間で働き口がある（性格にはやや難があるが）。むしろ、適切な書類を提出できない人間こそが、最も助けを必要としているのではないか？ 例えば、ユリアヌスとて、病や老いで床に伏せれば、そんな文章作成能力を失うだろう。そして、国家の助けとはまさに

そんな時にこそ必要なのではないか？

「なのに、実態は逆だ！ セヴェルスのように読み書きに慣れぬ者、老いや病に苦しんでいる者ほど、給付を受けられない！ こんな間違っている！」

ふーふーとユリアヌスの息が荒くなる。まるで生理二週間後禁欲中トゥルートの様だった。ところが、そのセヴェルスが言った。

「あとう、陛下。一人目の役人に何か褒美をやってはいけないのでげそか？」
ユリアヌスは驚く。

「な、何を言っているんですか。セヴェルス老！ 彼はあなたの訴えを無視したのですよ！」
「ですが、それは私事です。彼は己の職務に忠実であっただけの事では？」

「……あ……」

「わしは無学です。だから、政治の事などさっぱりです。しかし、戦場生活は長い。だから、兵隊に例えて言うでげすがね、上が進めと言えば、進むのが下の仕事。下が勝手に動いては、組織は成り立ちません。そして、彼は上に従っただけの事です」

「い、いやでも、その結果、一人のお年寄りが飢え死にするかも……」

「これは陛下にだから言いますね——その罪は彼ではなく、陛下らにあるのでは？」

「……！」

「重ねて、戦に喩えます。わしらが兵士らへ『盗賊の根城になっている山奥へ行つて、盗賊を討ち果たしてこい』と命令したとします。ところが、兵士たちが山奥に行っている間、盗賊が街に攻め入つて来て、大きな被害が出た——この責任は命令したわしらでげえすか？ 命令に従つた兵士たちでげすか？」

「そ……それは命令を出した僕らだ」ユリアヌスは認めつつも、自分でも苦しいと思う理屈を言ってみる。「だが、それは理論上の話だ。実際には現場の裁量権というものも認められる。

あの役人たちも、ちゃんと一人一人の人間を見て……」

「その結果がトゥルート殿にだけ、便宜を凶ろうとした二人目の役人でげす」

「……」

「正直、今日は役人というものを見直したでげす。いや、これこそ、私事でげすが……わしの素顔は醜い。歳をとつて、皺が増え、髭を生やしてからは、それなりの扱いを受けるようになりましたがね。若い頃は醜面、醜面と歩いているだけで石を投げられやした。トゥルート殿のような綺麗な顔が若い娘子にチャホヤされる陰で、一人腹を立てていたものでげす」

トゥルートは気まずそうに頬をかいた。

「ですが——真に腹立たしいのは、わしもそんな思いをしていながら、歳をとつて偉くなり、いざ自分が『選ぶ側』になると、やはり見目麗しいものを最^{ひいき}戻しそうになっていた事でげす」
……それは人間なら、仕方のない事だろう。そも、見目麗しいものを最^{ひいき}戻しそうになっていたというより、最^{ひいき}戻しそうになる存在を見目麗しいというのだ（これを【同語反復】^{トートロジー}というの

だろうか？)

だが、セヴェルスには辛かったという。

「しかし、今日は違った。あの一人目の役人は書類しか見ていなかった。人によっては融通の利かない冷血漢と罵るでしょう。けれども、この醜面しこづらのわしと、綺麗なトゥルートの殿を対等に扱ってくれた。おまけに……失礼でげすがね、醜さではわしに等しいユリアヌス様をちゃんと一番にしてくれた。顔は直せませんが、書類は直せます。なら、書類で区別される方がずっといい」

ここまで言われると、ユリアヌスも立つ瀬がない。

救いを求めて、トゥルートを見たが、彼女は彼女で「セヴェルス翁と同意見」と言う。

「一人目の役人はまともだと思ふよ。少なくとも二人目の役人よりはさ……あの手の類に顔で優遇される位ならいいけど……その内、身体を要求されたりするからな」

トゥルートの苦労人だった過去を明かしつつ、「セヴェルス翁に比べれば、恵まれていましたかね」とも続けた。さらに曰く。

「その上、一人目の役人は教会に行けば、飯にありつけると教えてくれた。ありがたい話さ。まー、キリスト教が流行るわけだよ」

「……」

とはいえ、それでいいのか？——とユリアヌスは悩んだ。

勿論、キリスト教が流行っているのは無理なからぬ話だ。昨今のローマ帝国は戦が長引き、飢えが蔓延っている。そこでキリスト教徒がパンを与えてくれれば、誰だって飛びつくだろう。また、こういったキリスト教徒による慈善事業は大いに称賛されるべきだとも思う。キリスト教を胡散臭い新興宗教と見る者は多い。しかし、その者達も、こういった奉仕の精神は清貧の倫理と並んで称賛している。……多分ユリアヌス自身もその系譜に属する。

——しかし、それは本来、市民と国家の手でなされるべきものではないのか？

いや、このユリアヌスの発想は順番が逆だろう。戦乱で市民と国家から、その力が失われたから、民衆はキリスト教のパンに縋らざるをえなくなったのだ。

そして、あの亜使徒聖大帝コンスタンティヌス一世はこの流れをむしろ利用した。キリスト教を公認し、その宗教の力で弱体化したローマの社会機能を補完し、さらに皇帝の権威を強化した。現在の正帝コンスタンティウス二世はその流れの継承者である。

——しかし、この流れに身を任せていいのか？

実際、ここにはトゥルードとセヴェルスがいる。二人ともキリスト教がいう異教徒だ。また、今更一神教に改宗できるとは思えない。仮に『神々は一柱だとは思わない？』と尋ねても、『【神々】なんだから、複数だろ？』と答えるだろうし、『神を蔑ろにしてないかい？』と尋ねても、『ええ。わしはオーデインとやらの社やしろも尊んどりますよ』と答えるだろう。

——…東方での特に熱心な一神教の布教活動を知ったらどうなる事やら…。
いずれにせよ、二人とも本質的に強い人間だ。何だかんだで【神】に縋らず、生きてきた。
今も救貧法の恩恵にあずかれなかったが、嘆く気配はない。むしろ、己に足らざるを学ぶ良き
機会と言わんばかりだ。

——でも、僕はそうではない、弱い人間のために働かなくちゃいけないんだ…。

素寒貧から、筆頭衛士や騎兵長官にまで上り詰める少数の例外を基準にしてはいけない。

それに——

「…第一、予算はそれなりに取ってあるんだ。何もあんな風に追い払わなくても…」

「あー、それ、現場の役人からすれば、やむを得ないところがあるかと…」

そこでシャハラザードが手を挙げた。

「どういう意味？」

「現場にはお金がないんで」

「だから、救貧法予算は確保してある！ まさか、横流しがそんなに酷いのか…?!」

軍隊でも横流しはあった。残念ながら、役所でも横流しはあるだろう。それは覚悟していた。

しかし、何事も程度の問題だ。ユリアヌスの集めた予算が全く現場に届かない程に、横流しが

酷いなど…。

「いや、横流しというよりも、中抜きが酷いですね」

「中抜き？」

「ええと、大雑把に予算の流れを説明しますと…」

↓
皇帝ユリアヌスが銀貨一万枚を『本当に困っている人』のために用意し、官僚Aに渡す。

↓
官僚Aが『本当に困っている人』基準認定委員会を作る。何故なら、『本当に困っている人』を助けるためにはまず『本当に困っている人』を決めねばならないので。なおこの時点で、人件費として銀貨百枚を消費。残り銀貨9900枚。

↓
官僚Bは『本当に困っている人』基準認定委員会の会場運営費として、また銀貨百枚を消費。残り銀貨9800枚。

↓
官僚Cはそも『本当に困っている人』基準認定委員を集めるための宣伝を打った。だって、広く市民から意見を募集しないとイケないし、自分で募集すると縁故採用の疑いがあるから。宣伝広告費として、銀貨百枚を消費。残り銀貨9700枚。

↓
「……ねえ、シャハラザード。僕、頭痛くなりそうな気がするんだけど……」
「では、結論を述べましょう。もともと、陛下のご推察通りでしょうが」
↓

官僚乙は銀貨を『本当に困っている人』に配る仕事に取り掛かるのだが、この時点で残りの銀貨は百枚を切っている。そして、この百枚を千人の貧民にばら撒くの不可能だ。そのため、九百人を『本当に困っている人』ではないとせねばならない。

「………」
ユリアヌスはやっぱり頭が痛くなった。

「厄介なのは一人一人の官僚を見れば、むしろ職務に忠実だと言う事ですね。汚職がないかと言え、嘘になりますが、個々の官僚が誠実優秀であっても『構造的』に中抜きが大量発生し、現場に予算が回らない」

「……具体的、定量的な記録は？」

「ええと、こちらに纏めてあります」

シャハラザードはそう言って、書類を一式運んできた。

ユリアヌスは目を通し、驚く。それが完成された報告書だったからだ。

「……シャハラザード、これを全部、君が調べたの？」

「はい」

「わかった。君は退出してくれ」

「はい」

そうして、彼女は執務室をキビキビと後にする。

素晴らしい人材だ！——ユリアヌスは手を握った。

実に優れた調査技能の持ち主だ。勿論、前歴故にサルステイウスなども財務関係には強い。が、人間関係が絡んでくると話は別だ。その点についてはいえば、あのペルシャ娘の方が上かもしれない。

「……でも、最近、あの娘、妙に熱心だよなあ。なんでだろ？」

ユリアヌスは不思議だった。いや、シャハラザードが有能なのは前々からわかっていたのだ。しかし、熱意に欠けていた。勿論、異邦人である彼女にそこまで期待する方が酷だ。それなりに働いてくれるなら、それで満足すべきだろう——と考えていたのだが、最近の彼女はむしろ誰よりもユリアヌスに尽くしてくれる。

すると、傍らのトゥルートが呟く。

「あれは……あまり信頼しない方がいい」

ユリアヌスは意外だった。自嘲の心算つもりだったのだ。第一、トゥールトらしくない。柄は悪いが、陰口を叩く類ではないのだ。

「君がそう言うには、何か理由があるんだよね？」

「……巧く説明できない。……くそつ、修辞学レトリックとやらは、こんな時のためにあるんだな……！」

トゥールトは悔しそうだった。語彙や教養に欠ける故、論理的に話せないのだろう。ただ、その誠意だけが伝わってきた。

そこでユリアヌスも思案をまともにかかす。

「……セヴェルス老、君も席を外してくれないか？」

「了解でげす」

そうして、彼は執務室をのしと後にする。

これでユリアヌスはトゥールトと二人きりになった。

「……トゥールト、確認したい。——軍は僕の味方と考えていいかな？」

「ん？ ああ、軍はお前の味方だ。それは断言できる」

今度はトゥールトもすらりと語った。

「現場を握ってる百人長辺りセントウリヤは、とりわけお前に忠誠を誓っている。内心はマルケルスと同じ奴がいても、何もできんさ。当然だな——バルバティウスに従った三万の末路を考えれば」

ユリアヌスはその答えに陰鬱になる。

行方がわからなかったバルバティウスとその配下三万だが、最近ようやく消息が判明した。

……生存者の証言によると、バルバティウスはユリアヌスと『別行動』を取ったものの、その後、ゲルマン人に襲われ、ほとんどが殺されたのだという。

バルバティウス自身はともかく、三万の兵士達は上官の命令に従っただけだ。その落命には悼まざるを得ない。

しかし、これはかえってユリアヌスへの忠誠を集める結果となった。

実際、元バルバティウス配下の生存兵は、皆一様に「自分もユリアヌス様の下で戦いたい！」と申し出た。ユリアヌスは乏しい兵数でありながら、より少ない犠牲であの会戦に勝った。バルバティウスは三万もの兵士を無駄死にさせた。ユリアヌスは意外と仕え難い男だ。規律に厳しく、また強姦や略奪を許さない上官だ。しかし、兵士を無駄死にはさせない。それどころか、連戦連捷の大勝利に導いてくれる。どちらに仕えたいかは明白というわけである。

「そうか……では強引にいこう」

——カエサル皇帝の起源は独裁者ディクタトルにこそあるのだから。

ユリアヌスの政策は簡潔だった。

「複雑化した社会制度の解体。古典的で単純明快な食料配布。言わば、『パンとサーカス』への回帰を行う。全体で見れば、こっちの方が安くなるからね」

市民権に対し、一律機械的に小麦を配布するだけの政策だ。これなら、読み書きが苦手でもその恩恵にあずかれる。ましてや容姿すがたかたちで差別されることもない。複雑な処理が不要なので、大量の官僚を抱え込む必要もなく、彼らによる（しばしば善意を伴う）中間搾取も排除できる。それがユリアヌスの論理だ。

しかし、官僚には大不評だった。大量の官僚を抱え込む必要もないという事は、その大半が免職されるという事である。また、これまでは戦争に専念していたユリアヌスが、内政に口を挟み始めた証でもある。なんとしても取りやめさせたいという意見が沸騰する。

数日してその代表格——ガリア総督フロレンティウスが駆け込んでくる。

「ユリアヌス陛下。これは本気なのですか？」

「うん。キリスト教徒は【働かざる者食うべからず】と非難するけど、結局、これが最も合理的だ」

「しかし、それでは労働意欲が！」

「機械的な一律配布なら、働く程に豊かになる。官僚裁量では『私弱者なんです！』と役所で騒げば、働かずに豊かになる。どちらが労働意欲を削ぐかは明白だろう」

「ですが、対ゲルマン戦で国庫は火の車です。市民全員への食料配布など財源が持ちますまい。やはり、ここは『本当に困っている人』への……！」

「でも計算したら、ちゃんと捻出できるよ。それどころか、税金を半分にできる」

「そんな馬鹿な……！ 税金を半分だなんて……！」

というフロレンティウスに財源案を見せる。彼がその書類を読み進めると、額から汗が噴き出した。そして、フロレンティウスはやつとの事で口を開く。

「しゅ、宗教法人への課税ですと！？」

「複雑化した社会制度の解体——と僕は言ったよ。当然、宗教法人への免税措置も根絶する」

「こ、皇帝陛下ともあろうお方が、無知蒙昧な民草と同じ誤解をしておられませんか？ 宗教法人もきちんと税を納めております。ただ、慈善活動や宗教行為について税を免ぜられているだけで……！」

「だから、その免税措置が行政を複雑にし、さらに国家財政を圧迫しているの。言ったでしょ。『複雑化した社会制度の解体』ってね。言っておくけど、別に宗教法人を狙い撃ちにしている訳ではないよ。免税や控除の類を一律に無くしているだけ」

「……社会への奉仕を目的としている宗教法人を、自身への営利を目的としている一般企業と同列に扱うべき——と？」

「ああ、同列とすべきだね」

ユリアヌスの動機は、さほど複雑なものではなかった。ユリアヌスの学んだ哲学は、五賢帝以前の社会のあり方を主に論じており、その頃には宗教法人という奇妙なものは存在していなかったのだ。

だからユリアヌスとしては

——宗教法人？ 何それ？ え？ 何で非課税なの？ だって、金もっているじゃん。税金とろうよ。

という単純なものだった。しかし、結果的にこの『単純さ』が今後の第一義となる。

だから、ユリアヌスは皇帝カエサルの口調でフロレンティウスに言う。

「自身への営利を目的としている一般企業と言ったが、では、麦を作る農民は社会に貢献していないのか？ お前たちは日頃何を食べているのだ？」

「儲けを弱者への喜捨につぎ込み、己は清貧を貫かれている宗教法人からも税金を取るべきとおっしゃられるか？」

「勿論取るべきではない。だが、それは宗教法人か否かが理由ではない。清貧を貫いているか否かのみが問題だ」

「実務的にも、乾いた雑巾を絞るより、あるところから、とるべきですね」

横から、サルステイウスもフロレンティウスに釘を刺す。

現実の宗教法人は、衰退を続けている帝国の中で、例外的な隆盛を始めているのだ。

フロレンティウスは目を伏せる。だが、その上で

「……しかし、これは……キリスト教徒を敵に回しますよ」

と言った。先程から、宗教法人と言葉を濁しているが、この時代、法人化する宗教団体はキリスト教ぐらいだ。ローマを含む多神教の多くは、それこそ江戸時代以前の日本神道に近い。

つまり、村人が持ち回りで社やしろを祭る程度のもので、専門の聖職者自体珍しい。逆に課税対象になるほど、金も集めているのは、やはり高度に組織化されたキリスト教なのだ。

「キリスト教徒だけではない」

しかし、ユリアヌスはそう言った。

「君を含む官僚、そして、複雑化した社会制度に助けられている数多の既得権益者を敵に回すだろう。……そもそも現行の制度も一つ一つを見れば、実に理に適ったものだ。今、君が宗教法人への免税措置を妥当だと熱弁を振るったように」

「ならば、何故？」

「それが積もり積もればどうなる？」

「……」

自覚はあったのだろう。フロレンティウスは黙り込んだ。

あの救貧法における中抜きと同じだ。中抜きの理由の一つ一つは真つ当なものだ。しかし、

それが積み重なった結果、役所の現場まで金が回らず、貧民が飢える事になる。

「……旅人が荷物を背負い過ぎれば、その重さに潰されるだけである？ 仮に、その荷物の一つ一つは実際に必要なものであったとしても？」

「僕と同じ事を考えた者は他にもいただろう。いや、ガリア総督フロレンティウスよ。君自身その先達の一人かもしれない。膨れ上がる財政支出とそれに伴う重税を見れば、同じ結論に辿り着くのは難しくない」

「しかし……財政健全化のための制度解体ほど難しい事はありません。だからこそ、ローマは……いえ、あらゆる大国は老大国となっていくのです」

「理由は？」

「陛下は既におわかりでしょう」フロレンティウスは苦笑いをした。それは疲れた大人の笑い方だった。「どんな制度にせよ、定着すれば、その恩恵は既得権益です。よって、制度の解体は既得権益の喪失を意味します。そして、既得権益者にとって制度解体が大きな損失を生むのに対して、国民一人当たりの制度解体による利益は小さなものです。故に、既得権益者は身を投げうってでも反対運動を行うのに対して、賛成運動はささやかどころかそも行われない事が多い」

また、官僚にすれば、制度が広範であるほど、失業の恐怖が少なく、制度が複雑であるほど、裁量という権力を手にできる。

「こうして、一度できた制度は不要になっても解体できないまま残ります。やがて、山積みになった制度に国は身動きが取れなくなり、民は押し潰されていく……」

「しかし、例外はある。それがかつての【独裁者】ディクタトルガイウス・ユリウス・カエサルだ」

カエサルは同様の病理に苦しんでいた共和政ローマを元首政ローマとして再生させた。再生される事が出来た。何故か？

彼が三つのものを持っていたからだ。ガリアの戦乱を平定した巨大な実績と、それに基づく強力な大衆の支持と、それを可能にした圧倒的な軍事力だ。この三つには改革への反対運動を黙らせる力があつた。

だから、カエサルはこの三つを柱として【独裁者】ディクタトルとなり、その強権で共和政ローマの既得権益を踏み躪り、元首政ローマの礎となったのだ。

……奇しくもそれは今のユリアヌスが兼ね備えているものと同じだった。

ユリアヌスも純粋な行政官としてはさほど優れていない。特に実務面ではサルステイウスやフロレンティウスに劣るだろう。しかし、改革を可能する暴力的な条件は満たしている。

——典型的な、そして、文字通りの独裁者誕生だな……。

しかし、ユリアヌスに躊躇う権利はない。今もガリアの民は飢えているのだ。なら、それを救うために必要な処置を取る義務がある。

「僕らはアルゲントラトゥムの勝利で安全保障セクレリタスをほぼ成し遂げた。だが、長引く戦乱で大衆は

疲れている。だから、膨れ上がった税金は半分にし、その上で貧民には麦を配る。これは僕の

【皇帝】^{カエサル}としての決定事項だ」

「それはつまり——逆にそれ以外は切り捨てるか？」

「ああ、ゴルディアスの結び目は刃を以って断ち切るしかない」

たとえ、それがダモクレスの剣であったとしても——。

この決意はサルステイウスとの別れに繋がった。

ユリアヌスの改革は予想通り各方面からの猛反発を生んだ。

勿論、支持者もいる。税金が半分になる上、パンにありつけるのだから、当然の話だ。

しかし、既得権益を失う者たちが賛同できるはずもない。彼らも必死だ。遙か東にいる正帝
コンスタンティウス二世へと、ユリアヌスの『横暴』を訴えに行っただ。

コンスタンティウスとて馬鹿ではない。一方的な欠席裁判でユリアヌスを断罪などしない。

具体的にはユリアヌスの腹心サルステイウスを指名し、ユリアヌス側の弁明を求めたのである。
こうなると、ユリアヌスもサルステイウスを東方へと送り出さなくてはならない。

勿論、苦渋の決断である。

ユリアヌスは皇帝業務の多忙を押しつけて、ガリアの属州線までサルステイウスを見送った
のだった。

その帰り道、カルケドンでの事だ。

皇帝ユリアヌスは己の筆頭衛士をなんとか慰めようと四苦八苦していた。

「トウルート……」

「五月蠅い。黙れ。これは目の汗だ」

トウルートはそう言いながら、グズグズと泣いていた。

彼女はサルステイウスと別れてから、ずっとこうだった。いや、別れの瞬間は違った。あの
時、感極まっていたのはむしろユリアヌスの方だった。皇帝の権威など知った事ではなかった。

ユリアヌスは恥も外聞もなく、サルステイウスに抱きつき、「僕の父さん、僕の父さん」と繰り返した。
ユリアヌスは幼くして父を亡くしている。サルステイウスのような立派な成人男性がいれば、
父と慕いたくなるも当然だ。そう思っていたが……。

——本当に抱きつきたかったのはトゥルルトだったのかもしれない。

現にトゥルルトは「サルステイウスの親父オヤジいゝ」と鼻水すら啜っている。考えてみれば、トゥルルトもまた幼くして父を亡くしている。サルステイウスに対し、父に対する想いを重ねていても無理はない。

いや、トゥルルトだけでない。周囲を見渡せば、共に行軍する兵士の中にも、頬を濡らしている者は少なくない。アルゲントラトゥムで終結の目途が立ったとはいえ、ガリアの戦乱は長かった。トゥルルトのように父を失った者も少なくない。サルステイウスは彼ら彼女にとって、まぎれもない父だったのだ。

——『ガリアの父』を代償にまでしたのだ。この改革は必ず成功させねば……。

その時だった。

突然、石が飛んできたのだ。

「え……？」

ユリアヌスは呆然としたままだったが、トゥルルトはその身を盾とし、フラスケス儀鉞を振るう。次の瞬間、その石は真つ二つになっていた。

「投石だ！」

トゥルルトは叫んだ。その顔も既に衛士のものだ。どうも、ユリアヌスへと飛んできた石を、トゥルルトがフラスケス儀鉞で斬り払ったらしい。これだけでも人間離れた腕前だ（なお、後で確認したところ、石の断面は鏡のように滑らかだった）が、彼女の異能はさらに凄まじい。

「犯人は右前方二十歩！ 麦畑の中だ！ 捕えろ！」

トゥルルトはそう言った。この状況で犯人の位置を断定したのである。しかも兵士達が半信半疑で指定された場所に向かうと、たしかに小柄な投石犯はそこに潜んでいたのだ。

投石犯は少女だった。歳の頃はトゥルルトやシャハラザードと大差ない。

少女は兵士達に捕えられ、ユリアヌスの前に引き出された。

すると、彼女は泣きじやくりながらも罵倒を始める。

「人殺し！ アンチキリスト！ お前のせいで、弟は死んだんだ！」

「え……」

ユリアヌスはその罵倒の対象が自分だと気付くまで少し時間がかかった。

むしろ、周囲の兵士達が先に怒る。忘れがちだが、今のユリアヌスは歴戦の名将で、内政面でも税金を半分にした改革者である。当然、信奉者は後を絶たない。

「こいつ、陛下に向かって、よくも……！」

兵士の一人が少女にグラディウス剛剣を向ける。

その寸前にユリアヌスは正気に戻った。

「戦友諸君、待ちたまえ！ 彼女に手を出してはならない！」
コンミリーテス
 ユリアヌスの言葉は間一髪で、興奮した兵士の剣を止めた。

「彼女は軍人ではない。従って、上官侮辱には相当しない。むしろこれはクイリーテス市民諸君による正当なる抗議である」

読んで好かった、ガリア戦記。市民と戦友を使い分ける事で、軍人の誇りに訴えかける技術である。クイリーテス

「しかし石を投げた！」兵士が言う。「これは傷害であり、抗議を逸脱している！」

「傷害ではない。傷害未遂である」ユリアヌスはトゥルートに改めて感謝した。「それに彼女を見よ。明らかに錯乱している。心神耗弱たる者の障害未遂ならば、精神病院への隔離が妥当。これはハドリアヌス帝の前例でも明らかだ」

本当は同じ五賢帝なら、やっぱリマルクス・アウレリウス帝が好きなんだけど！

「しかし……！」

「ローマは法治国家である！」

ユリアヌスは精一杯の大声で叫んだ。

その叫びは改めて兵士達に感銘を与えたいらしい。何名かは自主的にユリアヌスへ敬礼する。ただし、少女にとっては屈辱だったのだろう。「畜生。畜生」と憎悪を繰り返すばかりだ。

「……故に少女よ。一応、事情を聴こう」

ユリアヌスは胸の痛みを抑えつつ、馬上より為政者として振る舞った。

対する少女の説明は要領を得なかった。この手の『抗議者』にはありがちな事だ。

それでも、断片的な言葉をまとめると以下の通りになる。彼女には弟がいて、姉弟の父母は戦乱で殺された。だが、慈悲深いキリスト教徒の手で救われたらしい。教会に連れられて行き、その庇護の下にあった。しかし、ユリアヌスの『改革』で、その教会への援助が打ち切られた。結果、弟は流行り病で死んだらしい。

「そうだ！ ユリアヌス、あんたのせいであたしの弟は死んだんだ！」

——これは……想定済みだった。

ユリアヌスは唇をかんだ。

兵士の一人が苦渋を顔に出しつつも、その姉をなだめる。

「……しかし、それをユリアヌス様に当たるのは間違いだろう。教会への援助が打ち切られたとて、市民への援助が打ち切られた訳ではない。むしろ、小麦の配布などは……」

「あれっぽちの小麦で何になる！ 弟には薬代が必要だったんだ！」

……その姉の主張はすべてユリアヌスが想定していた通りだった。免税などによる教会への優遇政策が行われていれば、教会はその弟の薬代を捻出できた。しかし、教会への優遇政策は打ち切られた。勿論、税率は半分になった上、市民への小麦の配分も行われている。しかし、教会が優遇されていた時に比べ、姉弟の取り分は少なくなった。結果、その薬代を捻出できな

「ん、その小男……何喰っているんだ？」

「これー？ 醤油ガルムかけ麦粥ブルスだよ」

「おいおい、せつかく軍人になったんだぜ。麦粥如きで満足してどうすんだよ」

「でも、おいしいよー。この醤油ガルムも混じりっ気なしの本物だしー」

「肉を喰え。肉を」

「あー、蛇はともかく鼠の肉は泥くさくて苦手でさ。前に食べた時は辛かったよ……」

「何を訳のわからん事を。ちゃんと豚肉の配給があつたろう？」

「うん。でも、実戦の前は消化のいい粥がいいんだよ。満腹だと判断力が鈍るしね」

「熟練兵みたいな口叩きやがって。軍人が肉を喰わんでどうする？」

「いやいや、共和政時代のローマ軍団は粗食に耐えて地中海を制覇したんだし」

「屁理屈言うな。立派な体を作るのも軍人の義務だ。……って、お前ガリガリでヒョロヒョロ

じゃねーか？ 本当に大丈夫なのか？」

「……実は脂っこいのは苦手で、無理に食べると戻しちゃうんだ……」

「………おまえ、何で軍人になったんだよ？」

「あー、何でだろうね？」貧相な小男は苦笑する。「そういう君は何故戦場に？」

「はっ、決まっているいんだろう。蛮族をこのガリアから追い払って、男を上げるためさ」

「んー、君、新兵？ 蛮族の強さを知っている？」

「はっ、いくら蛮族が強くてもな、ローマ軍に勝てるはずがないだろ。特に今回はユリアヌス

陛下が直々に率いられるんだぜ」

「——皇帝ユリアヌスは信頼に足ると？」

「ま、五百で一万を撃退したっていうのは胡散臭いな。けど、一万三千で三万五千を包囲殲滅

したのはマジだろ？ きっと今度も驚天動地の華麗な勝利を見せてくれ……」

「それはありえないね」

貧相な小男が明快に否定する。

「五百で一万を撃退した時も、一万三千で三万五千を殲滅した時も、好き好んで寡兵で大軍に

挑んだ訳じゃない。挑まざるを得なかっただけだ。でも、今は違う。ガリアの兵站機構は確立

している。必要に応じて、万単位の兵士を運用できるんだ。寡兵で挑む理由はどこにもない。

今後は規律と補給と装備が整ったローマ軍団数千で、孤立している蛮族軍数百単位を計画的に

各個撃破する。五賢帝時代によく見られたシステムティックな必然の勝利が続くよ」

「は？ お前いったい何を……」

「それと君達の実戦を経験する機会も今後は少なくなると思う。というか、ローマ軍団の攻撃

回数をちゃんと数えている？ クノドマル撃破以後加速度的に減っている。要するにめぼしい

敵はほとんど潰したから、もう戦うべき相手が残っていないのさ。皇帝業務の大半も戦争から

内政に移行している。今回だって、開戦前に敵が降伏する可能性は高いよ。正常機能を始めた

ローマ軍団に勝てる見込みは薄い上、大人しく降伏してローマ開拓民の一人になった方が生活水準も高くなるからね」

「……何で、貴様がそんな事を断言できるんだよ？」

「そりゃ、僕がその皇帝ユリアヌスだからさ」

ユリアヌスの身なりは相変わらず質素だった。それこそ、兵士に交じっていても気付かれな
い程に。とはいえ、注意深ければ、気付いたはずだ。貧相な小男が尻にひいていた外套の色は
真紅——紛れもない皇帝の証であった。

新兵は絶句しつつも、「あっ」と背後の気配に振り返った。

ずっと監視していた筆頭衛士に気付いたらしい。

その金髪に目を震わせ、驚きの声を上げる。

「槍のトゥルト！ アルゲントラトゥムでクノドマルを捕縛した……あの筆頭衛士……！」

「発言を許可した覚えはない……！」

次の瞬間、新兵は儀鉞フラスケスの柄で殴られた。新兵は頬から血を流して倒れ込む。

——憎まれ役、ご苦労さん。

ユリアヌスは心の中でそう言った。

逆にトゥルトは後世の鬼軍曹よろしく新兵を怒鳴りつける。

「新兵！ 貴様がとるべき態度は何だ！？」

「はっ！ も、猛省しております……！」

「疑わしいな？ たるんでいるのではないか？」

「いえ、決して、その様な事は……！」

「ほう……？ ならば、腕立て伏せだ」

「はっ！」

新兵はその場ですぐに腕立て伏せを始める。

トゥルトはそんな新兵を冷たく見下ろしたままだ。

ユリアヌスは、麦粥ブルスと醤油ガラムの旨味を噛み締めつつ、何気なく言う。

「君、新兵の割に随分威勢が良かったよね？」

「……そ、それは……」

「若人なれば、志、大いによし。大言に相応しい働きを期待する」

「はっ……はいつ！」

新兵はむしろ興奮したように、腕立てを速めた。

皇帝ユリアヌスは上機嫌だった。今回は新兵も多いので、彼らの『仕上がり』をどうしても確かめたかった。例によって、お忍びで宿営に潜りこんだのだが、結果は文句なしである。

「うんうん。兵糧は末端まで行き届いているね。栄養状態も十分。体格優良。士気旺盛。やや血気に逸るけど、勇猛さの裏返しでもある。新兵というのはやっぱり気になるけど……まっ、これから学んでくれればいいしね」

しかし、トゥルルトはいささか不機嫌だった。二人きりになると、ぽつりと言う。

「……最近、あの手合いが増えたな」

「んー、戦場に希望を見出す輩？ 僕みたいに初陣で動けなくなるよりはずっとマシだと思うけど？」

「そういう意味じゃない」

「寡兵で大軍を破る事に浪漫を見出す輩？ でもさ、補給の問題があるのも事実だよ。一概に大軍がいいとはいえないんじゃない？」

「そういう意味じゃない」

「じゃ、どういう意味？」

「おまえを人間だと思っていない。軍神か何かと勘違いしている」

「——油断はしないよ」

ガリアの深くまで侵入したゲルマンには、アルゲントラトゥム（現ストラスブル）戦後も流転と抗戦を続けている部隊が少なくない。

今回、ローマ軍はそんなゲルマンの一部隊を追い詰めた。

久々の実戦になるかもしれない。ユリアヌスとて、気を引き締めねばならない。

「彼ら新兵を一人でも多く、生きて家族のもとへ返すために」

ところが、結局、開戦には至らなかった。

そのゲルマンは、万全のローマ軍を一目して、交戦の無謀を悟ったらしい。以前のフランク族と同じだ。それだけユリアヌス率いるローマ軍の強さは圧倒的だった。百戦錬磨のゲルマン軍も——いや、百戦錬磨のゲルマン軍だからこそ、一戦も交えることなく、和議——事実上の降伏を申し出てきたのである。

セヴェルスは『言った通りでげしよ。わしが敵なら戦う前に逃げ出すでげす——とね。ま、逃げる隙もありませんが』と自慢した。

シヤハラザードに至っては『百戦百勝、非善之善者也。不戦而屈人之兵、善之善者也』と東方風オリエントに絶賛した。

翌日――。

皇帝ユリアヌスはローマ軍団と共に水道工事へ自ら参加していた。

一応説明する。

昔から、ローマ軍団は土木工事の専門家だった。地中海世界に点在する都市も街道も水道も、その多くはローマ軍団が作ったものである。土木工事は平時における鍛錬を兼ね、また、戦場においてもその技術は発揮され、「ローマ軍はつるはしで勝つ」と言われた程だ。

だから、元々水道工事の予定はあった。ゲルマンとの戦が順調に終われば、辺り一帯の水道網を整備し直そうと言う話だったのである。

とはいえ、ユリアヌスは皇帝であり、皇帝自ら水道工事に鍬を振るうとなるとちょっと例がない。こういった『現場主義』にトゥルートはジト目を隠さなかった。それこそ、サルステイウスなら、絶対に許さなかっただろう。

――「いいや、これはキンキナトウスだよ！ キンキナトウス！ ローマ共和政時代の偉人ルキウス・クインクティウス・キンキナトウス！ 大地主の大富豪でありながら、上古の如く奴隷と共に自ら畑を耕したというキンキナトウス！ このキンキナトウスに倣って、僕も鍬を振るっているんだよ！ 別に最近書類仕事が多いから、たまには体を動かして、頭をすっきりさせたいとか、そんなんじゃないからね！ ……てか、キンキナトウスいいと思わない？ 平時は農作業に従事しながらも、元老院から独裁官に選ばれれば、市民の義務として、これを承諾。速やかに軍勢を率い、すぐに外敵を打ち破り、その後は農作業に戻る！ 半年の任期である独裁官の地位を十六日間で返上した事もある！ このキンキナトウスの行為には古人の

ワイルトウス 【武徳】が集約されているねっ！ うーん、萌え萌えくキュン♡」

昨夜ユリアヌスが弁解しつつ、寝台で身悶えていると、シャハラザードまでが軽蔑の視線を隠さなかった。

――小娘二人でドン引きして…女子供に何がわかる！

ユリアヌスが周囲の無理解（笑）に苛立ちながら、鍬を振るっていた時の事だ。筋骨隆々としたゲルマンの大男がいきなり近寄ってきた。

昨日、降伏したゲルマンの族長だ。

族長と言っても、ゲルマン人は野蛮人である。それだけに実力（というか、腕力）主義だ。

端的に言って、ムキムキだ。貧弱なユリアヌスなど、腕の一振りでもブチ殺せる事は疑いない（いや、一応は傍にいるトゥルートが対処してくれるはずだが…）。

その大男は言う。

「おい。その貧相な小男」

「な、なんででしょう？」

ユリアヌスは思わず敬語で答えてしまった。どうも、トゥルートといい、クノドマルといい、自分はこの手の野性味に弱いらしい。本当はまだ兄に甘えていたいのだろう。だから、戦わずして、勝った側の司令官なのに、もじもじしてしまうのだ。

「とりあえず、ここの土くれをあそこまで運ばばいいんだな」

「う、うん」

「わかった。間違っていれば、適時指摘しろ」

「え？ う、うん」

「よし」

その族長が土を運び始めた。筋骨隆々たるだけあって早い。いや、それだけではない。

「——おい！ てめえら！ 言われた通り動かんか！」

彼が族長らしく、一喝すると、他のゲルマン人もぞろぞろと従う。

他のローマ人もこれには戸惑ったが、当のユリアヌスがゲルマンと背中合わせに働いている。だから、ローマ人はぎこちなくもゲルマン人を受け入れ始めた。実際、まじめに働いてくれる男たちは大歓迎である。

結果、昨日まで敵同士だった二つの民族が、今日は共に手を取り合って働き始めた。

「ど、どういうこと？」

「ローマ皇帝ユリアヌス——お前の【武徳】ウィルトデスとやらに平伏したくなった」

この台詞にユリアヌスはやられてしまった。何かの罫ではないかとか、そういう疑念も吹き飛び、口も上手く回らなくなったぐらいだ。

「で、でも……今回の講和条件では非ローマ市民の公共事業への参加義務を免除しているよ。

だから、君たちはこの水道工事に参加しなくても……」

「手伝いたいから、手伝う。それはいけないのか？」

「い、いや、君たちの自由意思を妨げる権利はない。けど、本当にいいの？」

「技術を盗みたい。その下心もある——と言ったら、怒るか？」

「そんな事はない！」ユリアヌスは思わず声を上げる。「君たちは技術力を得て、僕らは労働力を得る！ 理想的な共存共栄だ！」

「だったら、文句ないだろ？」

「う、うん」

そして、ユリアヌスと『野蛮人』は背中合わせで、黙々と水道工事を続ける。

まるで、兄と共に奴隷労働をやっていた時のようだった。

——いや、あの時とは違う。二人共に義務ではなく、権利として、労働に参加しているのだ。歓喜に震えていると、大男がぼつりと聞いてくる。

『水道』だったか？」

「え？」

「今お前らが作っているモノの名だ」

「う、うん」

「俺はその『水道』とやらを見た事がない。しかし、それがあれば、新鮮清潔な水を常に口にできると言う。まるで魔法だ。信じられない話だな」

「嘘ではない！ 事実だ！ この水道が完成すれば、一々、井戸から水をくみ上げる必要も、川から水を運ぶ労苦も、すべては過去のものとなる！ その分の時間を読書に充てられる！」

「俺は文盲だ。自分の名を読み書きする事すらできない。読書など夢のまた夢だ」

「……ご、ごめん……」

ユリアヌスは反射的に謝罪し、そして、後悔した。彼らゲルマンにとっては文盲こそ誉ほまれで、文弱は恥なのかもしれないからだ。かつてのガリア人がそうであったように……。

これは価値観の押しつけなのか？——とぐるぐる悩む。しかし、

「だが、鹿狩りは好きだ。この『水道』とやらが出来て、鹿狩りに費やせる時間が増えるなら、それに越した事はない」

——皇帝になってよかった……！。 本当によかった……！！

泥にまみれ、汗を流し、しかし、それ以上に瞳が涙で一杯だった。

思えば、この時こそがユリアヌス人生最良の時であったのだろう。

最愛の少女と肌を重ねる時よりも、数倍の敵兵を葬り去る時よりも、至高の権力を手にする時よりも、『野蛮人』と背中を合わせて土を掘っていた時こそ、ユリアヌスの幸せだったのだ。

実際、万事うまくいっていた。

これと前後して、ユリアヌス達は行軍中、ゲルマニアの深森で奇妙な城砦を発見している。建築方式は明らかにローマ式だった。しかし、ほんの数か月前まで敵地であったゲルマニアに城砦を立てる術などあるはずもない。そも最近造られたものではない。最初に建築されてから百年は経っているだろうし、最後に補修されてからも百年は経っている。

「ももももしかして、これって……！」

「はいっ！ トラヤヌス帝の城砦です！ 間違いありません！ 我々はローマ帝国の最盛期の最前線まで辿りつけたのです！ 戻ってこられたのです！」

ユリアヌスが驚愕し、アンミアヌスが返答した。

…これがローマ帝国における弥終いやはての輝きだったのだろう。

それを示すかのように、この時期、ガリア全土において、婚姻と出産の増加が報告された。文明人にとって、出生率は景気の遅行指数である。子供の一人当たりにかかる費用で変化はするが、基本的に文明人は金があれば、子供を産み、金がなければ、子供を産まない。当然だ。文明人であれば、産んだ幼子を飢えさせるのは辛すぎる。だからこそ、文明人は子を育てられるか否かを、子を産む前に熟慮する。そこに精神論が入り込む余地はない。子供を産んでも、育てられないと考えれば、文明人は速やかに産み控えへ走る。

（日本の江戸時代でも將軍大名豪農豪商は子沢山だが、貧乏人は子供ゼロが普通だった。明治以降ではそれこそ所得と出生率の相関が統計的に証明できるほどだ）

そして、ローマ人は文明人である。だから、子供を産んでも育てる余裕がなければ、婚姻も出産もしない。逆に婚姻と出産が増加したという事は、若者達が皇帝ユリアヌスの下でなら、子供を育てられると判断した証である。

すなわち、ユリアヌスの治世がガリアにとっての黄金時代であったことを意味する。

…しかし、そのすべてを台無しにする報せしらせが東方より届く。

それは正帝コンスタンティウス二世からの主力兵士引き抜き命令だった。

…第十二話 (A.D.360)

ユリアヌスは一晩悩んで、決断を下した。

翌日、主だった者をルテティア（現パリ）の宮廷に集め、事情説明会が始めたのだ。

兵士達も初めはユリアヌスに招かれて、光榮そうにしていた。

だが…話を進めるうちに、彼らの顔色がどんどん暗くなっていく。

「つまり、東方あづまでペルシャと国境線がまた揉めているんだ。で、西方よこしまではゲルマンとの戦争も一段落したろ？　そこで君達主力兵士諸君には東へ行き、正帝コンスタンティウス二世の下で、ローマ帝国のため、ペルシャと戦うべし…という命令が届いたんだ」

ユリアヌスがこの結論を述べた時、兵士達の雰囲気は控えめにいつても最悪だった。

「…：それ、ユリアヌス様は納得したんですか？」

「納得は難しい。君達の戦力はかけがえがないからね。けど、ローマ帝国のためと言われれば、了承せざるを得ない。東方の防備も疎かにできないのは事実だ」

「…：ローマ帝国のためではなく、コンスタンティウス一個人の事情なのでは？」

「そうですね。俺、この前、聞きました。ユリアヌス様の兄貴も、あのコンスタンティウスに殺されたって！　そうだ…：あの時もコンスタンティウスはまず兵士を取り上げたって！」

「これは陰謀だ！　ユリアヌス様、大人しく従ったら、あなたも殺されちまう！」

兵士たちが沸き立った。ユリアヌスは「落ち着け！ 落ち着け！」と宥める。そして、
 「戦友諸君を信頼するが故、正直に言おう。ここだけの話だ。——僕も同じ事は考えた」
 「だったら！」

「が、東方の危機は事実だ！」ユリアヌスは言葉を遮る。「僕にも情報網はある。ペルシャは既に国境のアミダ砦を落としている。これは確認済みだ。諸君が正帝コンスタンティウス二世陛下の人格を疑うのは止めない。しかし、ここは状況で判断してもらいたい」

ペルシャとの戦争となれば、兵力は東方に割かねばならない。これはユリアヌスだろうと、コンスタンティウスだろうと、最高権力者なら誰もが同じ結論に到達する。また、少なくとも対ペルシャ戦に集中している間は、コンスタンティウスもユリアヌスに危害を加え、わざわざ西方を荒立てる事もない……はずだ。

「それに数年前、対ゲルマン戦が熾烈を極めた時、東側は西へ兵士を送り助けてくれた。なら、今度は西側が東へ兵士を送り助ける番だと思わないかい？」

「送られてきた兵士って、バルバテイウス軍ですか？……あいつら、全然役に立たなかったじゃないですか。正直いない方がマシだったですぜ」

「東から送られてきた者で役に立ったのは、それこそユリアヌス様ぐらいですよ。ところが、東側の連中は、そのユリアヌス様の足をひっぱってばかりだった。マルケルスがその典型だ」

「いや、あれは不幸な行き違いもあつたわけだし……。それに正帝陛下はこのガリアの困窮の際に麦も送ってくれたじゃないか」

「じゃあ、こつちも東に麦を送りましょうよ」

「ユリアヌス様のおかげで今年はウチの畑も実りがいい。あの時の分は利子つけて返せますよ」

——ああ言えば、こういう……。

ユリアヌスは頭を抱えながら訊ねる。

「……ねえ、君ら、そんなに東方へ行きたくないの？」

「……はい。行きたくありません」

主力兵士一同は一斉に頷いた。

「ペルシャというのは年中夏で熱く、水もほとんどない土地と聞きます。我々ガリア出身者も寒い冬と雪深い森には慣れていますが、そんなところはまっぴらごめんです。そもそもそんな砂漠でお役に立てそうありません」

「ガリアの防備もまだ十分とはいえません。野蛮人もかなり大人しくなったとはいえ、油断は禁物です。ここで主力兵士を東に移せば、また人命と農地が損なわれるでしょう」

「それに道路網や水道網といった公共設備の再整備も途中です。何しろ、ガリアはずっと戦乱続きでしたからね。何十年もほったらかしだった公共設備がゴロゴロあるんですよ。せめて、これらの再整備が終わるまではガリアにとどまるべきかと」

兵士達は矢継ぎ早に主張する。

——ああ、彼らの愛郷心が裏目に出ている。

ユリアヌスは嘆いた。

これまで何度も彼らの愛郷心には助けられてきた。ド素人の司令官でも、何とか軍事行動が可能だったのは、まさに彼らの故郷を愛する心があったからだ。強大な敵を打ち破れたのも、彼ら一人一人の『家族を守りたい。故郷を取り戻したい』という主体的な意思があったからだ（極言すれば、ユリアヌスなどはその想いを受け止めた器でしかない）。

しかし、それは愛郷心であって愛国心ではない。

つまり、目で見える故郷を愛する心であって、頭の中にしかない国家を愛する心ではない。

そう——彼らガリア兵士にとって、国家とは殆ど空想上の産物だった。無理もない。彼らの大多数は故郷で生まれ、故郷で死ぬ。目に映るのはガリアの大地、あとはせいぜいが隣接するブリタニアやヒスパニア、そして、ゲルマニアだ。遙か遠方のオリエントなど、神話の世界と大差がない。生身の実感がある故郷の危機に対しては戦える者達も、そんなあやふやなものために命を投げ出す事は出来ないのだろう。

——むしろ、その方が自然だ。

とすら思う。読書家ゆえに夢想家のユリアヌスとて、東方生まれである以上、西方事情には疎かった。実際にガリアへ足を運ぶまでは、現地の危機感など、まるでわかっていなかった。そして、今の彼らはちょうどその逆……いや、もっと酷い。古代人である以上、仕方ないが、ユリアヌスと違い、彼らの多くは読書などしない。だから、自分の身体感覚を頼りに生きる。それがトゥルトのような優れた判断力に繋がっているのだから、羨ましくもある。しかし、問題が大きくなってくると、部分最適が全体最適を阻んでしまう。具体的には、このガリアの平和には東方の防衛線も守らねばならず、そのためには兵力を割かねばならないという簡単な理屈がわかってもらえない。

せめて、東西の物流がもっと盛んなら——ガリアの市場で東方の物産が並び、それらを目にする事で、東方を身近に感じていれば——彼らも東方の危機に親身になったかもしれない。が、現実には戦乱で物流は途絶えつつあり、地産地消の傾向が強まっている。こうなると、東方の物産、東方との交流は金持ちの贅沢となる。それこそ、あのマルケルスのように。

これでは兵士達の共感を得られるはずがない。

おまけに兵士達の主張そのものも正論なのだ。

例えば、

「大体、契約違反じゃないですか？」

というのがその典型だ。

「俺達がローマ軍に入る時の契約書に書いてありましたよね？ 任地はガリア及びその周辺であり、アルプス以西に限る——と。なのに遙か東のペルシャに行けって？ それが法の民たる

ローマ人のやる事ですか？」

「……返す言葉がない。現にユリアヌス自身もコンスタンティウス向けの弁明で、この論法を使っている。どう言い繕っても、これはコンスタンティウス側に非があるのだ。」

——コンスタンティウスも何を考えているのだろうか？」

ユリアヌスは思う。

兵士達に東方行きを強^しければ、コンスタンティウスは恨まれるだろう。……と言うよりも、もう恨まれている。

兵士達の一部は『第一陣』として、既に東方行き出発準備中だ。が、彼らの内心は言うまでもなく不満たらたらである。当り前だ。耕すべき農地や守るべき家族と離れたい奴はいない。ユリアヌスも彼らの家族との別離には最大限の配慮を行っている。例えば、郵便の使用権限を与えるなど、だ。……しかし、その結果は正帝コンスタンティウス二世への怨嗟に繋がる。

——コンスタンティウスは自身を恨む兵士を連れてペルシャと戦う気なのか？」

それとも、兵士の心情など、考慮に値しないのか？ たしかに民主的なユリアヌスと違い、コンスタンティウスは専制的な君主だ。しかし、兵士の信望無くして戦争に勝てると思う程、愚かではなかったはずだ。

——やはり、エウセビア様の死は大きかったのか……？

……この少し前、正帝コンスタンティウス二世最愛の皇后エウセビアが病死している。

ユリアヌスは大いに悲しんだが、コンスタンティウスもまた深く悲しんだはずだ。その結果、コンスタンティウスは精神の均衡を崩したのかもしれない。兄ガルス時には見せたバランス感覚が今回見られない。実務的に考えても、皇后エウセビアの情報網がなくなれば、ガリアの状況がわかり難くなる。政治的に考えても、外戚代表がいなくなった事で、宦官の専横が止まらなくなる。個人的に考えても、エウセビアという緩衝材がなければ、コンスタンティウスとユリアヌスの間は険悪になりがちだ。

——どれもこれも、コンスタンティウスの判断力低下に繋がる。

正帝コンスタンティウス二世は暗君と呼ばれていた。しかし、暗君という言葉には『少なくとも暴君ではない』という含意があった（暴君というなら、むしろ、それはユリアヌスの方だ。ユリアヌスは政治改革の結果で名君と呼ばれているが、既得権益を喪失した者にとっては暴君でしかない）。

——しかし、この暗君は心の支えを失った事で、暴君の道を歩もうとしているのか……？。

ユリアヌスの不安に共鳴したかのように、兵士の一人が進み出る。

「ユリアヌス様、ユリアヌス様が我らの忠誠をお疑いなら、今、ここで自害してその証を立てましようか？ あるいは北の蛮族軍に単騎で突撃してきましようか？」

「……これまでの戦働きで諸君の忠誠は証明済みだ。無意味な事をする必要はない」

「光栄至極です。しかしながら、この忠誠はユリアヌス様にこそ、捧げ得るものなのです」

決して誰にでも捧げられるものではない——彼はそう言った。

「ユリアヌス様は決して使え易い主君はありません」

「……融通きかない性格だっという自覚はあるよ」

「はい。だから、陛下は敵前逃亡を凶った大隊長トリブヌスを容赦なく処刑し、さらには遺体の埋葬すら禁止されてきたのでしょうか」

——それは軍規だから仕方ないだろう！ 僕だって好きやっている訳じゃない！

ユリアヌスは叫びたい衝動をこらえた。

しかし、実際、その通りなのだ。トゥルートが軽口を叩こうが、新兵が生意気を言おうが、ユリアヌスは構わない。今のよう主力兵士達が反抗的だろうが、あの日のように少女が石を投げる『抗議』をしようが、ユリアヌスは構わない。しかし、戦場での敵前逃亡は許せない。……ユリアヌスだけではなく、他の兵士の命を奪うからだ。

だから、ユリアヌスは味方の兵士を峻厳に処刑している。

「それでもなお、私はユリアヌス様にお仕えしたいのです」

その兵士はそう明言した。

「処刑された兵士にすら同じ思いの者はいました。——何故だか、わかりますか？」

答える術はない。その兵士の目に浮かぶ涙を見たからだ。

「ユリアヌス様が我らの望む平和を実現されるからこそです。ユリアヌス様の御命令がその礎いしづえだからこそです。ユリアヌス様は蛮族を一掃されました。それどころか、今やゲルマンも我らと共に土を耕す仲間です。ユリアヌス様の下で戦うという事はそんな未来に貢献できるという事です。だから、死ねと言われて、死ぬるのです。しかし、それはユリアヌス様のお言葉だからです。……我らの命、そこまで安くはありません……！」

ポロキト、ポロキト、ポロキト 民の声は神の声——後の社会契約論にも繋がる理念だ。

その日は何も言えず、ユリアヌスは引き下がった。

だが、それでも命令は命令である。ユリアヌスは従わばならない。それが副帝という悲しい中間管理職だった。

そんな説得が一月に及んだ頃の事だ。

その日もユリアヌスは恒例となった主力兵士の説得を続けていた（ユリアヌスが丹精込めて育成してきた主力兵士は実に忍耐強い。懲罰的な意味で野宿をさせているが、全く堪こたえない）。ちなみにこの日は忠誠の観点から説得してみた。兵士達にユリアヌスへの忠誠があるように、ユリアヌスにも正帝コンスタンティウス二世への忠誠の義務がある——という論法だ。

「なあ、皆わかってくれ。僕は本来副帝カエサルなんだ。いやたしかに僕は皇帝インペラートルの名を何度も用いた。兵士を集め率いるにあたって、無位無官ではまずかったからね。けど繰り返すよ。僕は副帝カエサルだ。」

で、あるが以上は、正帝アウグストゥスの命令に従わざるを得ない」

「じゃあ、ユリアヌス様も【正帝アウグストゥス】になればいい」

禁断ともいうべき反応がサラッと出てきた。

「あ、あの君、自分が何言ってるかわかっている？」

「コンスタンティウスが怒って攻めてくるって事ですか？ その時は我々が先陣で戦います。いえ、むしろ、こちらからアルプスを越えて攻めに行きましょうかね？ で、ユリアヌス様がローマ帝国の唯一皇帝になればいい」

とんでもない事を言いやがった。こいつは反乱を推奨したのだ。

ユリアヌスは驚き、その兵士を咎めようとした。

ところが、他の兵士達はその暴論に——そうだそうだ——と賛同の意を示す。

「いや、いやいやいや！ 最初のストライキの理由はどこに行ったんだよ?!」

東方に行きたくないからと反抗していた連中が、東方に行きたくないから東方に攻め入ろうという。こんな無茶苦茶な話があるか！

「だから、これは妥協案ですよ。ユリアヌス様がどうしても東方で戦えというなら、戦います。でも、それは宮殿の奥の引っ込んでいるコンスタンティウスのためではない。俺たちガリアの民草のために尽くしてくれたユリアヌス様のため、ユリアヌス様の下で戦う。これが絶対条件です」

そうだそうだ——と兵士達はさらに賛同の意を示す。

「……っ」

嫌な予感はしていたのだ。

ユリアヌスは鈍い男だ。しかし、それでも気付いていた。自分を見る兵士の目がこの五年で激変している事に。

最初は子供を馬鹿にする目だった。

幾度かの実戦の後、反抗的な上級指揮官を更迭した頃から、互いに命を預け合う仲間を見る目になってきた。

そして、あの会戦の後は英雄を見る目になってしまったのだ。戦後復興を成し遂げつつある今ではすっかり神君扱いである。

下地はあった。……とはいえ、この流れは出来過ぎている。

——「誰に唆そそされた？」

ユリアヌスはその言葉を飲み込んだ。

おそらく、友人知人を何重にも経由しているはずだ。その過程で同調者が集まり、彼らの意思をさらに強固にする拡大再生産が行われたのだろう。

そして、その根源はおおよそ察しが付いているのだ。

翌日の夜明け、兵士の一団が宮殿に乗り込んだ。

ユリアヌスもさすがに驚いたが、それよりもむしろ彼らの口にする台詞に脅えた。

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

その声はセーヌ河の向こう岸にまで、届く程に大きく轟いた。

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

その吐息は酒臭かった。泥酔しているのは間違いない。まれに素面の者も混じっているが、彼らは彼らで酒精以外のものに泥酔していた。

兵士の一人が己の首にかけていた金鎖を外した。戦時の報酬品であり、純金故に当然高価なものである。だが、彼は惜しげもなく、それを外して、ユリアヌスの頭に載せた。それこそが真の帝冠であると言わんばかりに。

さらに彼らはユリアヌスを寄つてたかつて抱き上げた。基本貧弱なユリアヌスに抵抗できるはずもない。為されるがままになっていると、ユリアヌスは楯の上に押し上げられた。

あの S P Q R Ⅱ 【元老院並びにローマ市民】の四文字が描かれた楯の上に――。

そして、彼らはユリアヌスを乗せたまま、市中を練り歩いた。

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

……実に品性に欠ける儀式だった。東側のコンスタンティウス二世などが見れば嗤うだろう。なるほど、賤しい。これは『野蛮人』に由来する古札なのだ。

だが、それがガリアの伝統風俗に基づいた「王」の推戴であったのかもしれない。

いや、あるいは人類原初の「王」の推戴であったのかもしれない。

文字通り、ユリアヌスは祭り上げられたのだった。

トゥルートはシャハラザードを殴り飛ばした。

倒れたシャハラザードは、しかし、トゥルートを睨み返す。

「今回は問答無用というわけですか？」

「黙れ！ 貴様のせいでユリアヌスは……！」

「……いい加減目障りね」

「何だと！？」

「ちよつと上手く誑し込んだからって、ユリアヌス様をわかった気になるなんて――馬鹿女の

相手は疲れるって言っているのよ」

「貴様……！」

「じゃあ、聞くけど、ユリアヌス様が気付いていないと本気で思っているの？」

「そ、それは……」

ユリアヌスもとつく気付いているはずだ。——正帝擁立の影にシャハラザードの煽動がある事ぐらい。

なにしろ、突撃馬鹿のトゥルートにすら理解できる構図なのだから。

「だが、それでもあいつはお前を信じているんだぞ！ それなのに所詮お前はペルシャの手先でしかないのか？」

「ほーら、わかっていない」

「どういう意味だ?!」

実を言えば、わかった気になっていた。シャハラザードはペルシャの娘だ。よって、東方のペルシャのために働く。ローマ帝国の西側でユリアヌスが政権を立てれば、どう取り繕ってもローマ帝国の東側は動揺する。最悪内戦もあり得る。ペルシャの付け入る隙ができる。それがペルシャの狙いであり、シャハラザードの企みである……。

武辺者の悲しさだろう。この時のシャハラザードは本気でそう思っていた。

それどころか、そういった構図を推測できるようになった事を成長だとすら考えていたのだ。実際、以前はわからなかったユリアヌスとサルステイウスの会話が今になって理解でき始めていたのだから。

しかし、シャハラザードはわざとらしくため息をつく。

「この際、言わせてもらおうけど、ユリアヌス様はあなたの弟とは違うのよ。二十歳過ぎなのに、『弟』といちやつくのが好きな変態さんにはそれもわからない？」

トゥルートは頭に血が上った。しかし、ここで昂たかれば、第二文目を認めたと受け取られかねない。だから、トゥルートは大きく息を吸い、ゆっくりと第一文目にのみ、問い返す。

「……ユリアヌスにも野心があるというのか？」

「ユリアヌス様には必要があるのよ」

シャハラザードは明晰に論理を説く。

「歴史物語にもよくあるでしょ？ 有力な将軍が皇帝になろうとする時、将軍本人の自薦ではなく、その部下による他薦に基づくとね。将軍は何度も辞退するんだけど、部下の熱望により、洩々皇帝に即位する流れ。わたしも子供の頃は笑っていたけどね。皇帝になりたい野心家の、薄っぺらい謙虚さを宣伝する使い古された芝居だって。——でも実際ね、熱望する側になるとわかるわ。人の上に立つ者はそうでないといけないって」

すなわち、人の上に立つ者は、あくまでも人に支えられて上に立つのだ——と。

支える者、下から持ち上げる者なくして、人の上に立つなど、ありえないのだ——と。

「野蛮人の王様だってさ。俺が王様だーって、一人で叫ぶだけで、王様になれる？ そんな訳ないわよね。あくまでも臣民あつての王よ。王を王足らしめんとする多数の意志に支えられ、初めて王は王足りえる。ローマみたいな文明国なら尚の事——この程度の理、ユリアヌス様もおわかりよ」

「っ！ 煽動はユリアヌスの指示か!？」

「まさか。あれだけ多忙なユリアヌス様にそんな暇あると思う？ 言っておくけど、わたしにしたところで、似たようなものよ。正帝推挙みたいに面倒な話にまで踏み込む余裕はないわ。ただ、ユリアヌス様がガリアで采配を振るい易いように『工夫』はした」

曰く『ユリアヌスは勇敢な將軍だ』

曰く『ユリアヌスは誠実な行政官だ』

曰く『ユリアヌスこそ《皇帝》に相応しい』

シャハラザードはそう言った声をばら撒いたのだという。後世でいう世論誘導を行ったのだ。これが正帝推戴の遠因になったと言われれば、首肯せざるを得ない。

とはいえ……たしかにそれは政策説明と紙一重だ——そのくらいはトゥルートにもわかる。だから、

「それとも、反対派への対抗弁論を行わずに、税金を半分にするような政治改革ができる？ そんな事、東方のような専制国家でも無理よ。まして、民主国家の気風が強いこの西方ではね」

と言われれば、トゥルートも口籠ざるをえない。

「これは必要の結果であり、必然の結果なのよ」

そして、シャハラザードは最後に優しい声で言った。

「安心なさい。わたしが本当にユリアヌス様の意志を逸脱し、ユリアヌス様に有害となれば、ユリアヌス様はちゃんとわたしを殺すから」

「……!」

「そして、【プリムス・リクトル筆頭衛士】——皇帝陛下の懐刀である貴女あなたに、その命令が出ていないのでしょう？ なら、わたしはまだユリアヌス様の御心に沿っている事になる」

「……シャハラザード、お前……」

「何？ 惚れた主ドミナスのため、己を捧げ尽くしたい——って、あなたにはわからない？」

時に A.D.360——。

ユリアヌスは正帝推戴を受諾した。